

1480

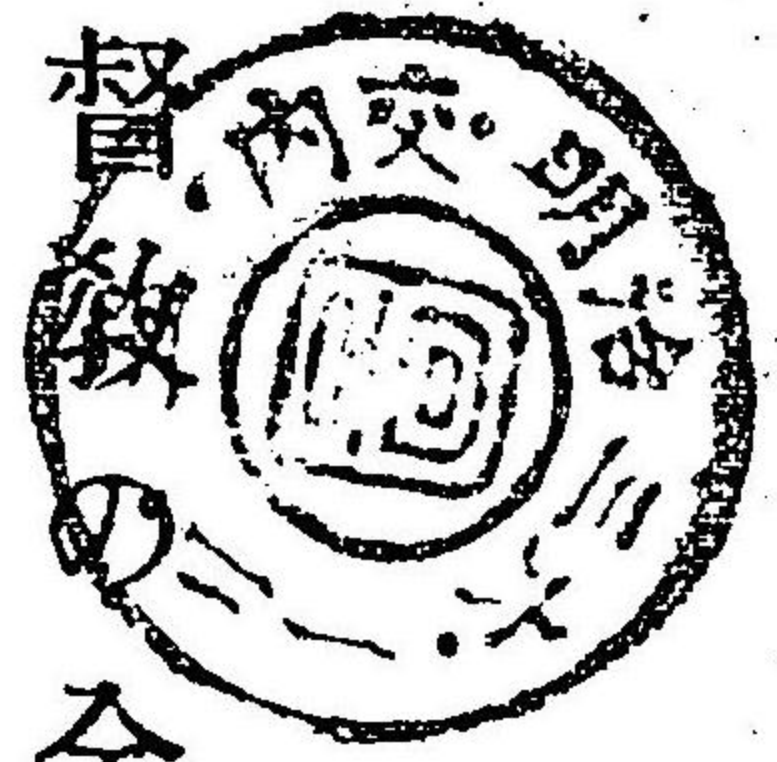
# 基督教的品性

東京 教文館





此片々たる小冊子素より基督教の全斑を  
 盡せるに非ず而かも健全にして且實際的  
 なる宗教を傳ふるに於て聊か補益あるべ  
 きを信じ敢て之を世に公にするもの也。



明治三十六年六月五日

著者

目次

一 緒論	……	一頁
二 謙遜	……	一七
三 悲觀	……	二八
四 柔和	……	三七
五 義	……	五〇
六 愛	……	六三
七 清き心	……	七八
八 神の子は争はず		八九
九 義人の受くべき運命		一〇三
十 品性の修養		一一五

基督教的品性

高木 壬太郎 述

(一) 緒論

我を召ひて主よ主よと曰ふもの盡く天國に入るに非ず、唯之に入るものは我天に在  
 ます父の旨に違ふ者のみ也……是故に凡て我此言を聽て行ふ者を磐の上に家  
 を建てたる智人に譬へん兩より大示出で、風吹きて其家を打ども倒るゝとなし。  
 是れ磐を基礎となしたれば也。

(馬太の廿一—廿六)

基督教が世に傳へられてより既に一千九百餘年になるのですが、基  
 督教とは何ぞやといふ問題は、陳腐の問題ではない、今日でもやは  
 り論せられて居るのであります。諺に「鹿を逐ふ獵師山を見ず」と  
 云ふとありますが、基督教信者は自ら基督教の中にはいりて、基

基督教の真相を見ることが出来ない。基督教を傳ふる所謂宗教家なるものが、屢々迷ふて基督教の真相を誤るやうな場合があります。今日に至るも尙基督教とは何ぞやといふ問題が論せられて居るのも畢竟之れが爲めであります。

試に基督教會の歴史を開いて學んで見ますならば、私共は何れが基督教の真相であるかといふとを疑はざるを得ないのであります。なせなれば千九百年間基督教として歴史に顯はれたものは決して一様ではない。基督教の宣傳者及び信者が殊に重を置きたるものは、時代に依て大なる相違があるのであります。例之紀元第三世紀の頃より第四、五世紀の頃に至るまで、教會の最も重を置きたるものは、教理即ち信仰箇條でありました。使徒信經といふのも此時代に出來

たのです。ニカヤの信條も、チャルセドンの信條も此時代の産物であります。此時代は神學上論争の時代で、多くの有名なる神學者が出て神學上の争論をやつたのです。殊にアリアス、アサナシアスは東西の二雄將で、此二雄將を首領として、兩派鎗を削て戦つたのです。が、ニカヤの宗教大會に依て遂にアサナシアスの勝利となり、所謂ニカヤの信仰箇條といふものが出來て、基督教徒は是非共此信仰箇條を信せんければならぬといふとが、殆ど永久に定まつたのであります。即ち此信仰箇條は基督教徒と非基督教徒とを區別する標準でありまして、此點から見れば、基督教とは一箇の定まりたる教理を信するに在りと申さなければならぬのであります。それから紀元六、七世紀の頃から十五、六世紀の頃に至るまでの間を見ますと

教會の最も重を置いたものは寧ろ儀式でありまして、神を禮拜する爲めに莊嚴なる儀式が設けられました。而して之と同時に僧院主義と申す一派がありました、是は此世から離れて山林若くは原野にはいりて、潔い生活をするのが其主張でありました。それから間もなく宗教改革が起りまして、様々に變遷して今日に至つたのであります。今日でも以上申したやうな傾向はまだ存在して居るのです。即ち或一派の人々は大層信仰箇條に重を置きまして、基督信者とは斯々の信仰箇條を信する者でなくてはならぬと主張して居るのみならず、少し之に異つた説を立つるものがあれば、忽ち異端であるとして攻撃し、迫害し、之を教會から放逐しやうとして居ります。又或一派の人々は儀式に重を置て、斯々の儀式を守らなければ、眞に

基督信徒と稱するものでないと云つて居ります。而して又他の一派の人々は教會に重を置て、此教會が眞正の基督教會で、即ち使徒傳承のものである、此教會に屬せざるものは眞の意味に於て基督信徒と稱すべきものでないと迄云つて居るものがあります。或は又倫理に大層重を置て、基督教を倫理の教訓と殆ど同一視して居る一派の人々もあります。又社會的運動に非常に重を置て、基督教とは畢竟社會的運動に外ならぬと主張して居るものもムリです。此の如く議論紛々として、何れが基督教の真相であるか、私共は何れに重を置いてよいのであるか、一寸分らなくなるのであります。抑も私共は此の如く議論紛々たる中に立ちて何れの説に従つたならばよいのでせうか。私共の取るべき地位は何れに在るでせうか。私の考ふ

る處に依れば、私共の取るべき最も安全の道は此等の説に往かずして直ちに基督に往くのであります。基督教唯一の憑據は基督であるといふことは私共の異議なく信ずる處であります。試に四福音書を讀で基督が新に世に齎し來れるものは何であるか、基督が殊に此世に携へ來られたる使命は何であるかを見ますならば、基督教の真相が分るであらうと思ひます。

抑も基督が新に世に齎し玉へるものといふのは何でありますか。莊嚴なる儀式でムりませうか。當時猶太教に於てはエルサレムに結構輪奐を極めたる神殿がありまして、之に伴ふ莊嚴なる儀式が備はつて居つたのです。然るに基督は此莊嚴なる儀式を採用し玉はなかつたのみならず、却て之を破壊し玉ふたのでムります。基督の宗教は

精神的宗教で、儀式を要する宗教でない。儀式に不當の重を置くが如きは素より基督教の本色でムりませぬ。然らば基督は哲學上の智識を携へ來られたのでありませうか。凡そ宗教上の問題は亦哲學上の問題であります。故に基督の教へ玉ふた眞理は哲學上の智識に關係なきものではありません。けれ共基督は之を哲學上の眞理として語られたのでも、又哲學者の如く教へられたのでもないといふ事は明でムります。然らば倫理的教訓を興ふるのは基督使命の重要な目的でムりませうか。眞正の宗教は倫理と離るべきものでない、故に基督の教へ玉へる教訓が倫理的であつたといふとは申すまでもムりません。けれ共基督の教へ玉へる倫理は必らずしも基督の自ら發明し玉ひしものではムりません。社會的運動は基督教の一の活動

であります。基督の精神、衷に動けば發して社會的運動となるので  
 すけれ共基督教は社會的運動より大なる者で、兩者を同一視するは  
 素より大なる誤であります。『我を信せよ』とは基督の我等に命じ  
 玉へる所であります。けれ共基督は信仰箇條を造て之を人に強い玉  
 はなかつた。基督を信ずると否とは、疑もなく基督教徒と非基督  
 教徒と分るゝ點であります。或る形状の信仰箇條を信ずると否と  
 は必ずしも基督教徒と非基督教徒とを分つ標準となすとは出來な  
 いのです。勿論私は信仰箇條を不必要といふものではありませ  
 ん。既に私共が教會を造つた以上は信仰箇條も、儀式も、政治も必  
 要であります。唯私は是等のものは基督教の或る顯現であつて、  
 基督教其物ではない、私共が不當の重を置くべきものでないと申  
 すのであります。

然らば則ち基督教其物、私共の最も重を置くべきものとは何であ  
 りますか。私は品性であると申すのです。基督の創始せるもの、基  
 督の發見せるもの、基督の新に持ち來れるものは品性であります。  
 基督の基督たる點は其言ひ玉ひし處よりも、其在り玉ひし處、其爲  
 し玉ひし處に存在するのです。彼は必ずしも新しき思想を持ち來り  
 たるのではありません。又彼は必ずしも新なる律法を造つたのでも  
 ありません。彼の言ひ玉ひし處は古の哲學者も云ひ、彼の教へ玉  
 ひし處は古の律法家、預言者も教へたのであります。けれ共彼の  
 持ち來りたる偉大なる品性は後にも前にも何人も持ち來りたるもの  
 がないのです、彼は實に最も新なる品性の摸型を持ち來りて人類に



示し玉ふたのでムります。基督教と申すのは此偉大なる品性の謂であつて、基督教徒と申すのは此偉大なる品性に接し、其感化を蒙り之を自己に同化するものを申すのでムります。之を外にしては其他のものは言ふに足らぬのでムります。

勿論品性の模型は、基督の此世に來り玉はざりし以前に於ても存在したのです。少くとも四箇の模型は基督以前に於て存在したので、今日でも此品性は尙存在して居るのです。即ち第一は道德的品性です。道德的品性とは道德的律法を守るもので、猶太教は此模型の中に在るのです。數千年間支那及び我國に行はれて、長く士人の心を支配したる儒教も、此模型の中に入るべきもので、夫の近時頻りに説かれて居る武士道も亦此模型の中に入るべきものでムりませう。道德

的品性は勿論立派なる品性で、私共は此品性の中に多くの美點を見出すのです。けれ共單に道德的なる品性には活氣なく、生命なく、又冷酷で愉快の念がないのです。義務の念は動いても愛心より喜んで善を行ふといふ動機がないのです。次には智識的品性です。智識的品性とは、智識を以て人類の最も重すべきものとなす所のもので、古の希臘人の品性は即ち此模型の中に入るべきものでムります。彼等は使徒保羅の申した如く、智慧を求めたるもので、智慧と智識のないものは直に之を輕蔑したものです。今日我國の所謂學者と稱せられ、識者と稱せらるゝ人々は此種類の品性を求むるものでも申しませうか。彼等の主として貴ぶ所は智識でありまして、智識さへあればそれで立派なる人物が出来るかのごとく思つて居ります。

勿論此種の品性にも美點がないのではありません。智識其物は決して輕蔑すべきものではなりません。が單に智識的なる品性は屢々徳を欠くもので、其極浮華、倨傲に流るゝものであります。素より私共の取るべき品性ではない、第三の模型は或は政治的品性でも申しませうか、基督降生當時の羅馬人は其好模型であります、此處には法律が凡ての標準であります、從て秩序が重んぜられ、階級が貴ばるゝのであります。我國今日の官吏氣質は此種にでも屬すると申しませうか。此種の模型の品性としての價值は論ずるにも及ばぬとであります。第四は商賣的品性で、古のフイニシヤ人、今の支那人は即ち此模型に屬するのです。此品性の重なる處は富で、富を以て凡ての標準とするのです、我國の商人は即ち此種の品性を有するも

ので、所謂商人氣質といふのは是であります。併し近時は商人ばかりではない、所謂拜金宗の信徒が何れの社會にも多くなつて來て、案外此種の品性を有するものが多くあります。以上四種の品性は基督以前より存在するもので、今日此等の品性は基督教以外に盛に行はれて居るのであります。而して今日我國の學風に就て之を云つて見れば概して智識的品性を養ふに急にして道德的品性といふものは誠に少ないのであります。而して更に之を分類して見れば所謂政治的品性、商賣的品性なるものも盛に養はれて居るのであります。基督の携へ來つた品性は以上四種の品性と異なるので、更に一種の模型を私共に示したのであります。勿論其品性は道德的であるには相違ない、けれ共單に道德的ではない、道德的と

申すにはあまりに自由であるのです。又基督の品性は智識的であり  
 ます。彼は自らを真理也と申しました。彼の品性の中に誤謬や迷信  
 を発見するとは勿論出来ませぬ。けれ共之を單に智識的と云ふには  
 あまりに莊嚴でふります。私共は之に名くる言を發見するに苦しむ  
 のですが、強て名くれば宗教的若しくは精神的品性とでも申しませ  
 う。

此品性は私共が四福音書に顯はれて居る基督に就て發見するので  
 ります。基督教徒とは此品性を發見して、常に之に接し、之が感化  
 を蒙り、終に之と同化するものを云ふのです。故に基督教的品性と  
 云ふのは基督を模範として形造くる品性を申すのでふります。而し  
 て此基督教的品性の要素は如何なるものであるか、是れが私が今よ

り諸君と共に研究したいと思ふ處のもので、私は之を基督山上の説  
 教の一部に取つたのでふります。此山上の説教に就ては、學者の間  
 に多少の議論がふりまして、或學者は此中から神學上の議論、即ち  
 教理を發見せんと勉めました。又或學者は此中から基督教の或大切  
 なる教理を發見する事が出来ないと言つて、此説教は基督教全体か  
 ら云へば不充充分なる者であると云ひ、更に他の學者は此説教は論理  
 の教訓を教へたるに過ぎざるが故に、基督教は倫理的宗教に過ぎな  
 いと申します。私は此説教を以て基督教の全面也と申すものではあ  
 りません。けれ共基督教の核實は慥に此中に存在せりと思ひます。  
 此説教は基督の宗教の實言であります。而して初めに記されたる所  
 謂美福と稱するものは、基督自己の品性で、私共基督教徒の同化す

へきもの、換言すれば是れが基督教的品性の要素であります。此品性の要素を學んで之を養ふのが基督教の最も重なる處で、信仰箇條を彼此申したり、儀式をやかましく云ふのは抑も末でムります。勿論私共は此等のものを輕蔑するに及ばぬ、又之は對して異議を唱ふるにも及びませぬ。要は品性と申すに最も重を置いて、所謂基督教的品性を建設することを勉むるのが私共の爲すべき所であるのでムります。今より基督のお言葉に就て此品性を造る要素を順次研究致しませう。

(二) 謙遜

心の貧しき者は福也、天國は即ち其人の有なれば也

(馬太五の三)

是れより基督山上の説教中所謂美福と稱するものに就き、基督教的品性の要素を順次お話し申しませう。先づ第一の要素は、謙遜であります。『心の貧しき』と申すのは、思想の乏しさを云ふのではありません、感情の乏しさを云ふでもありません、又勇氣の足らざるを云ふでもありません。道徳上己の不完全を自知するを申すので、一言を以て之を云へば謙遜に外ならぬのでムります。當時パリサイの徒は自ら義とすると甚しく、更に己の不完全にして罪惡に汚れたることを知りませんでムりました。使徒保羅は曾て己がパリサイ宗に在りし時の経験を述べて、『律法に在る所の義に依れば

玷なき者也』と申しました。彼は曾て自ら完全なる人物であると信じたので、うりました。當時の猶太國は殆ど此の如き人物を以て充たされて居つたので、彼等は世俗的にして私意私慾を恣にし、人に褒められんことを好み、又執着の念が深くありましたが、少しも此等の罪惡たることを心付かず、自ら義人と思つて居つたのであります。『神よ我は他の人の如く強索、不義、姦淫せず、又此の税吏の如くにもあらざるを謝す』とは彼等の祈禱でありました。天國は斯る人の心の中に住むとは出来ません。斯る人は今將に世に來らんとする新生命、新宗教に對して同情を有するとは出来ません。來らんとする新宗教に同情を表し、天國の幸福を味ひ得るものは、唯道德上己の不完全なるを知り、謙遜して道を求むるもののみであります。

ります。是れ耶穌が道を傳ふるに方り、劈頭第一に謙遜を説き玉ひたる所以であります。

謙遜は神の國に入る第一歩であるのみではない、基督教徒の生涯を通じて有すべき品性であります。故に基督は屢々謙遜を説かれたのです。『天國に在るものは嬰兒の如し』と云ひ、『凡て自己を高くするものは卑くせられ、自己を卑くするものは高くせらるべし』と云ひ、『爾曹の中首たらんと欲ふ者は爾曹の僕となるべし』と云ふが如きは、何れも謙徳を教へ玉ふた言であります。基督は雷に言に於て謙徳を教へ玉ふたのみでない、其身に於て之が模範を示し玉ふたのです。保羅は基督の謙徳を稱へて『彼は神の体にて居りしかども、自ら其神と匹く在る處の事を棄てがたき事と思はず、反て己を虚ふし、僕

の貌を取りて人の如くなれり。既に人の如き形状にて顯はれ己を卑くし、死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受くるに至れり」と申しました。實に基督の御生涯は謙遜の御生涯でありました。彼は自ら申された如く、「人を役ふ爲には非ず、反て人に役はれん爲に」來られたのであります。夫の弟子の足を洗ひ玉ひしが如きは、唯其謙遜なる御生涯の一の顯現に過ぎないのです。故に彼は「我は心柔和にして、謙遜者なれば、我軛を負ひて我れに學べ」と仰せられました。我等の先づ學ぶべきは此謙遜であります。此謙遜を欠くならば基督教に入ることが出來ざるのみならず、全く基督教徒たる資格がないのです。カライルは基督教は謙徳の宗教であると申しました。其如く基督教徒とは謙遜の人を云ふのであります。

勿論基督教の謙遜とは卑屈の謂ではふりません。カーチナル、ニコーマン會て舊新二教が重を置く處に相違あるを述べて、「プロテスタント教の最大の徳は自尊で、羅馬教の最大の徳は謙遜である」と申しました。此言の中には慥に眞理を含んで居ります。けれども眞の謙遜は必ずしも自尊又は自信と矛盾するものではない、否寧ろ其上に立て居るものです。保羅は謙遜に定義を下して、「自己の考ふべきよりも高く、自己に就て考へざると」であるを申しました。自己の考ふべきよりも高く自己に就て考ふるは傲慢です。けれ共自己の考ふべきよりも低く自己に就て考ふるは卑屈です。眞の謙遜とは自己の眞價値を認めて自己の價値に従て自己を計るのです。保羅は自己の價値を知らざるものではなかつた。彼は自己の考ふべ

きよりも低く自己に就て考ふるものではなかつた。けれ共彼は尙ほ其心中を告白して『我は罪人の中首也』と申しました。基督教徒の品性には此謙遜が要るのです。常に謙遜りて神の前に自己を吟味する時に、私共は自己を義とすることは出来ない。唯謙遜りて、自己の罪人の首なることを告白するより外はないのであります。

又保羅は嘗て其経験を述べて、『我れ是等の望を既に得たりといふに非ず、又既に全ふせられたりといふに非ず、或は取るとあらんとて我唯之を追ひ求む』と申しました。私共道を修むるに方りて常に有すべきは此謙遜です。『若し自ら能く物を知ると思ふ者は未だ其知るべき程をも知らざる者也』。私共の徳の進まざるは謙遜の足らざるが爲めであります。私共が心を空ふして常に學ぶならば徳も智識も進歩して止まぬのであります。

基督信者の一の欠點は動もすれば不信者を輕蔑することであり、夫のパリサイ人が『神よ我は他の人の如く強索、不義、姦淫せず、又此稅吏の如くにもあらざるを謝す』と祈つたのは、自ら義として他を輕蔑したので、基督の惡み玉ふた處でありますが、今日私共は之れに類した心もち、又之れに類したとを申しはしますまいか。不信者や不信者から見ると、基督信者は傲慢に思はるゝといふやうな事は、私の屢々聞いたとであります。白眼以て異教徒を見るといふとは、所謂精神的倨傲で、決して基督信徒の品性でない。勿論私共は自ら信する處がある、又自ら重なる處があるのです。我等は『學者とパリサイ人の義しきよりも義しき者』であると信じて居

るのであります。けれ共神を敬ひ善をなす者唯基督信徒のみでは  
りません。神はエリヤの知らざる七千人を撰みてバアルに跪かざら  
しめ玉ひし如く、世の中にも亦多少の義人、善人があるのです。若  
し私共自ら義として異教徒を輕蔑するならば、是れパリサイ人の  
過に陥るものであります。

又基督信徒たるものは、黨を結び、又は虚榮を求むるが如きことをす  
べき者でありません。故に保羅は『何事を思ふにも黨を結び、或は  
虚榮を求むる心を抱く可らず、各々謙りたる心を以て互に人を  
己れに愈れりさせよ』と申しました。人は兎角不潔なる名譽心に支  
配せられ易きもので、誠に悲しむべきことでありますが、基督信徒の  
中にも亦間々此心に支配せらるゝものがある。従て長上を凌いだ

り、徒黨を結んだりして教會を動搖せしむるやうなことをする人物が  
間々あるのですが、是れも畢竟謙徳が欠乏せるからで、此の如き人  
が基督教的品性に於て欠けて居るといふとは申す迄もないのです。  
又基督教徒たる品性を有たんとする人々は、勉めて批評的に流れぬ  
やうに注意せんければならぬ。基督は『爾兄弟の目に在る物屑を  
視て己が目に在る梁木を知らざるは何ぞや、己の目に梁木のあるに  
如何で兄弟に向ひて、爾が目にある物屑を我に取らせよと曰ふとを  
得んや』と仰せられました。謙徳を備へて居る人は、人を責むる  
ものでない、自ら責むるものであります。然るに今日實際に於ては  
基督信徒程人の欠點を見るに敏にして、之を責むるに嚴に、而して  
自ら待つ寛大なるものはないかと思はれます。是れは昔時パリサイ



人の陥つた過失でありまして、基督は嘗て彼等に向て、『爾曹の中罪なき者先づ彼を石にて撃つべし』と仰せられたとが曇ります。自ら罪なき者でなければ、人を責むる権利はないのです。他の事は措きまして、信者の説教者に對する態度を見ますに、或る信者は批評的に説教を聞て居る。彼等は修徳の爲めに説教を聞くのでない、批評の爲めに聞くのです。故に彼等は其欠點を見出すに敏で、忽ちに不満を唱へて教會にも出席しないやうになるのです。是れは獨り青年信者のみでない、否却て老熟の信者に多いので曇ります。私は西洋諸國では、信仰も智識も徳も經驗も富んで居る老博士が規則正しく教會に出席して、眞面目に謙遜に青年牧師の説教を聞て居るのを見て深く感心したのです。又青年等が牧師の説教を批評するを聞くに

彼等は假令つまらない説教でも、妄りに之を酷評せぬ、却て自らを責めて自分の深く感動し得なかつたのは、畢竟自分の心の用意が足らなかつた爲であつたらうといふやうに申して居ります。此寛大と此謙遜とは實に美はしい品性で私共の學ぶべき點であると思ひます以上私は謙遜に就て簡略にお話し申したのでありますが、基督教の品性の基礎をなすのは、此謙遜であります。此謙遜がなければ其他の品性の要素は得られないのであります。孔子は『もし周公の才の美あるも驕り且吝ならしめば其餘は見るに足らざるのみ』と申しましたが、私も亦此の如く申したいのであります。

(三) 悲觀

哀む者は福也、其人は安慰を得べければ也

(馬太五の四)

基督教の品性の第二の要素は悲哀であります。「哀む者が福である」と申すのは如何にも逆説であります。けれども是れは眞理であります。併し悲哀が基督教の品性の要素であるといふことを了解する爲めには、先づ基督の所謂悲哀とは何であるかを知らんければならぬのです。悲哀に二種の別があります、一は世の悲、他は神に備ふの悲です。世の悲とは世に屬するものを失ひし時に之を悲むの悲で、例之私共が健全なる身体を有する場合には、之を福として喜びますが、一朝病に罹るときは只管不幸を啣ちて之を悲しみます。是は世の悲であります。又世の人は富を有することを以て此上もなき幸福として喜びます。従て富が得られぬとか、又は得たる富を失ふとか致しますれば、非常に失望して之を悲しみます。是等は所謂世に屬する悲であります。又罪惡を悲むといふとに就て之を申しましても、世の人は通常罪惡其ものを悲しむのではない、罪の結果を悲しむのです。惡しき事をすれば、何時しか其事が世間に顯はれる、世間に顯はるれば、名譽をも信用をも失つて、再び世に立つことが出来なくなる、之を悲しみ恐れるのです。故に若し世間に顯はれないで秘密に保つて往くことが出来るならば、平氣で惡いことをするのです。又惡い事をして世間の人が之を惡いと云はない、是れが却て成功の捷徑となるならば、少しも憚らずして惡事をなすのです。而して己の爲した事が愈々世間に發表して、世人から酷く攻撃される、果は法

して喜びます。従て富が得られぬとか、又は得たる富を失ふとか致しますれば、非常に失望して之を悲しみます。是等は所謂世に屬する悲であります。又罪惡を悲むといふとに就て之を申しましても、世の人は通常罪惡其ものを悲しむのではない、罪の結果を悲しむのです。惡しき事をすれば、何時しか其事が世間に顯はれる、世間に顯はるれば、名譽をも信用をも失つて、再び世に立つことが出来なくなる、之を悲しみ恐れるのです。故に若し世間に顯はれないで秘密に保つて往くことが出来るならば、平氣で惡いことをするのです。又惡い事をして世間の人が之を惡いと云はない、是れが却て成功の捷徑となるならば、少しも憚らずして惡事をなすのです。而して己の爲した事が愈々世間に發表して、世人から酷く攻撃される、果は法

網に觸れるといふやうな場合になつて、初めて自己の爲した罪惡を  
 悲み憎むのですが、併し是は罪惡其物を罪惡として悲しみ憎むので  
 はない、畢竟其結果を悲しみ憎むに過ぎないのです。故に之を世に  
 屬する悲と申すのです。基督の所謂悲とは此等のものでありませ  
 ん。先づ第一物質的でないのです。此世に屬する目に見ゆる富や、  
 權力や、健康を得られないとか、又は之を失つたとか云ふのを悲し  
 むのではないのです。寧ろ是は精神的で、自己の不完全なるを發見  
 して之を悲しむのです。自己の罪惡に滿てるを思ふて之を悲しむの  
 です。己の心の汚れたるを見て之を悲しむのです。換言すれば自己  
 の品性の低さを思ふて之を悲しむのです。罪の結果を憎むのではな  
 い、罪其物を憎んで、己の心に聊にても罪の在るを悲しみ、之れ

より遁れんとするのであります。

基督教徒となるには勿論此悲が必要で、之がなければ悔改と云  
 ふとは出來ない、従て基督教徒となる譯には往かぬのですが、基督  
 教徒たる品性としても、矢張此悲が必要であります。私共は世の  
 罪を悲しむのみならず、常に自己の罪を悲まなければならぬ、常に  
 自ら顧みて自己の欠點を認め之を悲しむ人、是れが即ち基督教徒で  
 あります。

使徒保羅がテモアに贈る書中に於て『我は罪人の首也』といふたのは  
 彼が年若い時の經驗を申したのではない、又彼が基督教を迫害した  
 時の經驗を申したのでもない。彼が晩年既に信仰と戦を戦ひ、走る  
 べき道程を走つた時の經驗であります。故に『罪人の首なり』と云ふ

て、『罪人の首なりし』とは申しません。彼は決して戯言を吐いたの  
 ではない、光明ある良心と強き道徳的意識とに照して、實に自己の  
 尙不完全にして罪惡に満てるを悲しみ、斯くは述懐したのであり  
 ます。中世に生れたる聖フランシスと申す人は、常に己の罪惡を悲  
 しみ、痛哭したる餘り其眼を泣きはらしめました。其友が之を諫めま  
 した時に、彼は答へて、『余は神を見んとて心の眼の淨まらんため出  
 づる涙をせきとめんよりも、寧ろ肉体の眼を失ふは優れる事也と思  
 へり』と申したといふとです。彼は後世の人が崇めて聖徒と申した  
 程潔き信仰の生涯を送つた人でありましたが、尙斯の如く罪惡を感  
 じて之を悲しんだのです。ジョン、パンヤンも深く罪惡を感じた人  
 で、曾て『我は我目には夫の蝦蟇の厭はしさよりも尙厭はしく見ゆ  
 る也、神の目には尙更に然らん、余は余の心の惡しきと、汚れたる  
 事に於ては、恐らく惡魔のみ余と均しからんと思へ』りと申しまし  
 た。是は一二の例に過ぎぬのですが、高尚なる基督教的品性には、  
 必らず自己の罪を悲しむ悲が伴ふのであります。

罪を悲しむと云ふと、罪を犯すと云ふとは素より異つて居りま  
 す。罪を悲む爲には罪を犯さねばならぬと思ふならば、素より誤つ  
 て居ります。罪を悲むその深淺は、罪を犯すとの多少と逆比例する  
 ものです。換言すれば私共は罪がなくなればなくなる程深く罪を感  
 ずるものです、海岸に佇立する人よりも海上に乗り出したる人は、  
 海の廣大なるを知て、渺たる滄海の一粟我生の須臾なるを悲しむ  
 杯申す感じが起るのです。山麓に踞する人よりも山巔に攀ち上る人

は天の益々高きを知りて、自己の小さきことを深く感ずるのです。己の無學を知るは無學の人よりも寧ろ博學の人であります。學問の範圍は學ぶに従つて擴大せらるゝもので、私共は學べば學ぶ程多々益々己の無學を感じます。宗教、道徳の事に至ても亦同一でムりまして、道に進む一步なれば、私共の良心は一層の光明を増し、私共の道徳的意識は一層の強さを増し、自己の罪惡を一層深く感ずるやうになるのです。若し爰に青年の學生があまりまして、私は既に學問の奧義を究め盡しました、私は既に完全の智識に達しましたと申すならば、私共は此學生の無學を笑ひませう。又青年の畫家があつて、私は畫の一技に於ては美妙の域に達した、私の作は古羅馬名工の作と比しても遜色はありませんと申すならば、私共は寧ろ此青年畫家の愚

を憫れませう。之れと同じく、己の品性の不完全なるを知らず、自己の罪惡をも感せず、自ら得たりとして得々として居る人があるならば、其人は寧ろ甚だ不完全にして罪惡に満てるものであることを示すもので、素より之を高尙なる基督教的品性と申すとは出来ません。

それで私共が今基督教徒として考ふべきことは、私共は如何に深く自己の罪惡を感じて居るかといふことであります。私は常に思つて居るのですが、どうも私共には大悲觀といふものがない、從つて大樂天觀と云ふものがないのである。大に悲まなければ、大に喜ぶとは出来ないのです。悲むのは素より私共の目的ではない、目的は喜ぶとであります。故に基督は「悲む者は福也、其人は安慰を得べければ

也』と申されました。私共基督信徒の實驗から申しまして、大に慰められたとがふりませうか、非常なる喜を得たとがふりませうか。今現に私共は心に溢る、許りの喜悅を得て居りませうか。基督信徒の多くは非常に此喜、此安慰を得て居らんのではありませんまいか。而して其原因は大に悲んだとがないからであります。大に悲んだとがない、従て又大に喜んだとがないといふのは實に淺薄な品性であります。どうか私共は眞に悲しみ、眞に喜ぶの實驗を得て、基督の「哀む者は福也、其人は安慰を得べければ也」と云ひ玉へる眞意を會得したいものであります。

(四) 柔和

「柔和なる者は福也、其人は地を圃ぐとを得べければ也」

(馬太五の五)

基督教的品性第三の要素は柔和です。基督は「柔和なる者は福也、其人は地を圃ぐとを得可ければ也」と申されました。而して基督自らに就ては「我は心柔和にして謙遜者なれば、我が軛を負ひて我に學へ」と申されました。保羅の書翰を見ましても、基督教徒たる者は柔和でなければならぬと申すを屢々云ふてあります。今其一二を擧げて申しますれば以弗所書四の一、二に「去れば主に在りて囚人となれる我れ爾曹に勸む、爾曹召されし召に符ひて行はんことを悉く謙遜と柔和と寛容なる心を以て行ひ、愛を以て互に忍び」云々と申してあります。又提多書三の一、二に「汝彼等をして、、、、

人を誘はらず、争はず、和平にして凡ての人を待ぶに柔和を以てせんことを憶起さしむべし』と申してあります。又哥羅西書三の十二には『是故に爾曹神に選ばれてさよく且愛せらるゝ者となりたれば慈悲、矜恤、謙遜、柔和、忍耐を衣よ』と申してあります。又加拉太書五の廿二に保羅が靈の結ぶ果を數へた中にも、柔和を一の徳として數へてあります。彼得も亦此點に就て無頓着ではなかつた。故に其一の書三の四には『唯心の中にかくれたる人、即ち壞るとなき柔和、恬靜なる靈を以て粧飾とすべし』と云ひ、同三の十五には『爾曹の衷に在る望の緣由を問ふ人には柔和と畏懼とを以て答を爲さんとを恒に備へよ』と申してあります。此の如く聖書の中には謙遜に次で柔和の大切なることを極言してあります。去らば基督教徒として其完

全なる品性を養はんとするものは此點に注意せんければなりません

抑も聖書の所謂柔和とは如何なる意義で云りますか山上説教美福中の柔和といふ原語の意義に就ては、多少學者の間に解説の相違があるやうで云ります。カイムといふ學者は、其有名なる『基督傳』に於て之を『神を待つ者』と譯してあります。即ち全く宗教的に解釋したのであります。柔和といふ意味には從順といふ意味が含まれて居ります。從順といふは之を宗教的の方面から云へば、神に服従するので、即ち神を待つのであります。基督が『我は我心をなさん爲めに來れるに非ず、神の聖旨をなさん爲め也』と云ひ、又ゲツセマ子の園中に於て、『去れど我心を爲さんとに非ず、聖旨の儘になし玉へ』

と祈られたのは、自己の意志に従て動かない、神の聖旨を待て動いたので、是れ即ち神に對する柔和であります。故に之を宗教的の方面より見て、『神を待つ』と譯し、神に服従する義也と解釋するも強ち失當の事でありません。

併し通常の學者は之を柔和と譯し、寧ろ倫理的に解釋するのです。勿論倫理的の基礎としては宗教的の意味があるのですが、それは基礎としての事で、私は兎に角之を倫理的に解釋して其與ふる教訓を學びたいと思ひます。

去らば倫理的に解釋して柔和とは何の事でせうか、ヘンリー、ウォールド、ピーチャーは之を解釋して『柔和とは人の最も高尚なる靈性の活動の平安なる有様を云へるもので、換言すれば意志の力強く

して卑陋なる情慾の爲めに動かされざるとである』と申しました。先づ。第一柔和と申すのは、言語や舉動の如き一局部の事でなくして、人全体を含むので、理性も感情も行爲も悉く此中に在るのであります換言すれば柔和は人の性情、即ち心の全体に在るので、心柔和にして、其結果又言語、舉動が自然柔和なるを申すのです。俗に猫冠りと申すとを云ひます。是は言語、舉動だけはやさしく見えても其心は却て陰險であるをいふので、是れは勿論柔和ではなりません。而して第二に、柔和は單に消極的の徳でありません。柔和と薄志弱行とは素より大なる相違がります。世の中に通常柔和と稱せらるゝ人の中には弱い人があります。けれ共聖書の所謂柔和は弱いとでない、寧ろ強いとで、柔和と申す中には勢力を含んで居るので



す。人の性情の下部には粗暴なる、過激なる、陋劣なる一種の情念  
 があります。夫の激怒し易い人、道理も理由も考へないで、妄りに  
 人を怒り、其果之を憎み殺す（假令刀に於て殺さるるも舌を以て殺  
 す）底の人は、即ち此下等なる性質を抑制することが出来ないので、  
 強さに似たれ其實は弱いのです。柔和の人といふのは此下等なる粗  
 暴過激の上にある道徳性が活動して、適宜に其下等なる性質を抑制  
 し。清きものを發達し、汚れたるものを滅盡せしむる人をいふので  
 あります。故に柔和といふのは消極的の徳ではない、寧ろ勢力を含  
 む積極的の徳でムります。

希臘語の柔和といふ言と、踏み付けらるゝといふ言との間に、どん  
 な關係があるか分りませんが、全体の意味から申しますれば、柔和  
 とは或人の解釋した如く、踏み付けらるゝといふとであります。人  
 に踏み付けられて敢て猥りに怒らない、こちらも亦踏み付けやうと  
 しない、彼の踏み付けるに任せて置くのが柔和でムります。勿論正  
 當防衛は必ずしも悪いのではムりません。否、實際必要の場合があ  
 るので、基督も保羅も正當防衛をなしたとがあるのでムります。併  
 し人間の弱點として私共は屢々正當防衛よりも以上の事、即ち復  
 讐的の行爲をなすとあります。是は柔和ではない、従て基督教的  
 品性でないのです。基督教的品性は寧ろ人に踏み付けられて、其踏  
 み付くるに任せて置くのです。『讐を復すは我に在り』とは神の嚴  
 なる言でムります。私共は決して自ら復讐すべきものでない、何  
 事も神に任せて、其命に安ずると云ふのが、柔和と申すので、真正

のクリスチャンは此の如くなすべき筈でムります。

前に私は柔和とは人全体を含むので、言語や舉動の如き一局部に限るべきものでないといふことを申しました。勿論柔和は心より出づべきもので、外部のみの柔和は價值なきものでありますが、柔和なる心より出でたる柔和なる言語、柔和なる舉動と申すものは甚だ大切でムります。基督は「人は善き心の庫より善きものを出し、惡しき心の庫より惡しきものを出す」と仰せられました。言語、舉動なるものは畢竟心の外に顯はれたものでムりますから。品性に關係を有するものでムります。故に私共はクリスチャンとして言語、舉動に注意するといふが必要でムります。英語の紳士と申しますのは即ち柔和なる人を申すので、粗暴、野卑なる言語を用ゐ、若くは

此の如き舉動をなすものは、紳士と稱することが出來ざるのみならず、實はクリスチャンと申すとは出來ないのでムります。

舊爰に『地を嗣ぐ』と申しますのは、昔時イスラエル人が埃及を出で、カナンの地に入り遂に之を所有すると申す故事から出でた事であり、之を直譯的に解釋しても差支はムりません。即ち基督の意は、柔和なるものが、天下を支配するものであるといふ意味でムります。言を換へて云へば、眞正の勢力は柔和なる者に在りと申すとでムります。ソロモンの箴言の中に、『柔かき舌は骨を挫く』といふことがあります。即ち之と同意でムります。柔和なるものが人を支配し、天下を取るといふとは一見自家撞着の如く思はれますが、實際左様であるのです。世人は唯強いものが人を支配し、天下を取

るが如く思ふて居りますが、決してそうでは有りません。其斯くの如く見ゆるのは、唯一時の事で有ります。ダビデ王は兵力を以て天下を征服し、猶太王國を建設したので有りますが、尙「柔和なる者は國を嗣ぐ」と歌ひました。(詩篇卅七の十一) 彼は兵力を以て一旦天下を征服致しましたけれ共、之を以て長く天下を支配すると能はざるを悟つたので有ります。昔より世界の歴史に出でた英雄豪傑を數ふるものは、何人も先づ指を歴山、シーサー、ナポレオンに屈するで有りませう。此等の人は何れも不世出の英才、神出鬼没の兵略を以て天下を一統したので有ります。けれ共彼等の國は久しからずして滅び、彼等が雄圖の跡は、徒に世人をして「夏草や兵共の夢の跡」と歎息せしむるに過ぎないので有ります。之に反して身に

寸兵を用ゐず。否、世に斥けられ、人に踏み付けられたる耶穌基督は如何で有りませう。彼は前にも申します通り、世に生れたるもの、中最も柔和なるもので有ります。彼は曾て人を抑へ付け、又は天下を握らうとは致しません、否、力を以て世を支配するは彼の望む處でなかつたのです。然るに當時人に踏み付けられたる彼は遂に、甚しく人に崇められ、天下の万民に依りて神とし事へらるゝに至つたのです。今日天下を支配して居るものは歴山でも、シーサーでもナポレオンでもないナザレの耶穌基督と、其流を汲む彼の弟子等で有ります。

私共實際の生活に於て人に勝つ道は怒るものではありません、強き言語を用ゐる事でもありません、人を罵詈するともありません、

人に勝ち、人を踏み付けやうとするとでもありません。寧ろ人に勝たれ、人に踏付けらるゝとです。換言すれば柔和でムります。小兒を教育する父母又は教師たるものが、柔和を以て親切に之を教育するならば、どんな亂暴なものでも之を化することが出来ます。友を諫めんとするものも、柔和なる言語を以てするならば、其罪を悔改めさずることが出来ます。俗に眞綿で首を締めるといふとを申しますが、是も柔和の勢力を申したのでムりませう。詈罵譏謗や、又過激の言で人を服せしむるとはとても出来ません。去れば諸君の中頑固なる親があつて機嫌が取り悪いとか、怒り易い良人があつてむづかしいとかいふやうなことがムりますならば、此際に處する道は唯柔和でムります。夫の暴風を御覽なさい、其一たび吹くや樹木を倒し、家を破壊し、船舶を覆し、其勢如何にもすさしまくあります。ければ是れ唯一時でムります。之に反して軟風の吹くや、花園には花笑ひ、果木園には果物實り、田野には穀物野菜豊饒に、森林には野禽歌ひ、人は健康を喜び、天地は喜悅に満ちて居ります。柔和なる人の齎らす結果も亦之と同じく、幸福、喜悅、平和、愉快を興へ、其勢力は大なるのみならず。又永遠に續くものでムります。ごうか私共は此柔和の徳を養ひ、クリスチャンたる完全の品性を備ふる様致したきものでムります。

## (五) 義

饑渴することく義を慕ふ者は福也、其人は飽くとを得べければ也。(馬太五の六)

基督教品性第四の要素として基督の爰に述べられたるは饑え渴く如く義を慕ふと申すことであります。

聖書の中に在る義と云ふ言語には、様々の意味があります。殊に保羅の書翰に在る義といふ言には、神學上の意味があるのであります。併し福音書に在る義、基督の此處に云はれた義と云ふ言には、そう云ふやうな六かしい意味はありません。單に之を道德上の意味、即ち正義と解して宜しいのです。神の定め玉ふたる律法——道德上の律法、是れが即ち正義です。之を守らうと云ふのが即ち義を慕ふのです。言を換へて云へば、基督教徒たらんものは、何物にもまさり

て神の定め玉ふたる道德上の律法を守り、義しき生活を爲さんければならぬ、基督教徒たる品性には此精神と此實行が必要であると云ふのです。基督の宗教は福音を申しまして、神の恩寵を説く宗教であります。救及び罪の赦といふとに最も重を置く處の宗教であります。併し基督教は何處迄も倫理的宗教でありまして、神の恩寵と云ふも、救といふも、罪の赦といふも道德を離れて出来るものでありませぬ。故に私共が福音書を讀んで基督の宗教を學ぶ時に、彼が道德の方面に最も重を置かれたるを見るのです。唯今お話し申しまする義といふのは即ち此倫理的方面です。一口に申せば、義といふのは道義若くは道德です。

基督教的品性には此道義若くは道德が必要です。否饑渴く如くに之

を求めなければならぬ。併し基督教徒の品性としての義とは、どういふものでありませうか。基督が特別に此處に之を指定し玉ふたには、何か存細があるのでムリませうか。當時猶太教徒と雖も、義といふとを知らぬのではない、否、義といふ言は猶太教の警語でありました。基督教の言といふよりも猶太教の言といふ方がよい位のとであります。夫のパリサイの徒と稱するものが最も重を置いたのは義といふとです。神の定め玉ふた律法を守るといふとです。彼等は舊約の律法を能く學びて之に通じて居りました。又自ら許多の律法を造りて之を守り、人にも守らしめんとしました。彼等は決して義を求めざるものではなかつた、最も熱心に義を求めたものであります。然るに基督は殊に之を基督教徒の品性の一要素として爰に

指示したのみでない、更に言を添へて「我れ爾曹に告ん、學者とパリサイの人の義よりも爾曹の義さと勝れずば必らず天國に入ると能はじ」と申されました。去れば基督教徒品性の一要素としての義は私共が特別に注意して學ぶべき價値あるものと思ひます。前申す通り義と云ふのは廣い意味の言で、道德と解して差支ないのであります、之を基督教徒の品性として見る時は私は之を三通りに説明したいと思ひます。

先づ第一に基督教の所謂義は部分的に非ずして全体であります、是はパリサイ人の義と基督教の義とを較べて見れば能く分ります。夫のパリサイ人は第四戒即ち安息日を守るといふとに非常に重を置いて居りました。安息日に生んだ鶏卵は食べてよいかどうかといふ

事で黨派が分れるといふ程、安息日問題はやかましき問題で、此點に於て彼等は實に嚴格なる規律家でありましたが、彼等は同じ十戒の中父母を敬へといふ戒をば守て居らなかつた、偽りの誓を立つると勿れといふ戒、甚しきは姦淫する勿れといふ戒さへも犯して居つたといふとです。即ちパリサイ人の義は部分的です。唯一部の道徳を守つたのみで、全体の道徳を守つたのではない。是れは基督教の所謂義と申すものではないのであります。

使徒雅各は「人律法を悉く守るとも、若し其一に躓かば、是れ全を犯す也、夫れ姦淫する勿れと言へる者、又殺すと勿れと云へば、爾曹姦淫せずとも者し殺すとせば律法を犯す者となる也」と申しました。是れは即ち基督教品性の要する義を申したのです、基督教の

品性は凡ての義を守るのです、律法の一點一畫をも守るのです。故に基督は「人もし誠の至微き一を壞り、又其如く人に教へなば、天國に於て至微者と云はれん」と申されました。基督教の品性を造らんとする者は此點に注意する必要があると云ふります。或方面の徳義には注意するけれ共、他の方面には無頓着であるのみならず、些少の事は律法を犯してもよいと思ふ人がないではない。勿論道徳の律法に輕重はあるのです、けれ共高き品性は其輕きものをも輕卒にしな

いのです。折角一方に徳義を守ても、他方に欠點があれば何もない。宛も障子のやうなもので、四方を締め切ても、一方があいて居れば寒い風がはいつて来る。小さな空でも、隙間でも其處から寒い風がはいる。又戸締のやうなもので、いくら四方に錠をかけて嚴重

に戸締りをして、もし窓の戸を一ヶ處戸締りをせんで置かならば、其處から泥棒がはいつて来る、而して其外の嚴重な戸締りが何の益にも立たなくなつてしまふ。基督教の品性もそうです。いくら或る點に骨を折つても他の點に無頓着であるなら仕方がありません。例之或る信者はよく安息日を守り、又傳道もするが、親には存外不孝をして居るといふならば、誠に價値のない信者です。又或る信者は甚だ熱心であるが、口が悪い、人を誇りたり、傷づけたり、時には虚言さへ言ふといふならば、其熱心は何の益にも立たぬのです。基督教の求むる義は部分的ではない、全体でありますから私共は凡ての徳を守るやうに心掛けねばならぬのです。

次に基督教的品性の求むる義は外形的ではない、精神的であります。夫のパリサイの徒は律法の文字に拘泥して、其精神を失ひました。手を洗ひ口を潔め、椀や皿の外部を清潔にするを勉めたけれ共、心を潔くし、人を愛することを忘れてしまひました、斷食をしたり、又は長き祈を捧げましたり致しましたけれ共、人を愛し人に親切をするとはしない、よし爲ても心からしたのではない、唯人に見せん爲めにしたのであります。斷食をし、祈禱をするをさへも、人に見せんためであつたと申します。即ち彼等の所謂義なるものは全く外形的で精神的でなかつたのです。基督教品性の求むる義とは斯る外形的のものでありません、全く精神的のものです。心から善をなし、心から道を行ふのです。而して又文字のために精神を害さないので。保羅は『儀文は殺し、靈は



活す』と申しました。又基督はパリサイ人の小事に矢筈しくして、大事を疎にするを誘りて「蠅を漉出して駱駝を呑むものだ」と申されましたが、是は誠に面白い言で申します。王陽明傳習録の序に斯ふいふことが書いてある。王陽明が其門人が私かに陽明の言を録するものありと聞いて、之れに申すには、聖賢の人を教ふるは宛も醫が藥を用ゆるが如きもので、皆病に由て方を立て、其虚實、溫涼、陰陽内外を酌んで時々之を加減するので、要は病を去るに在るのである、若し一方を拘執せば恐らくは人を殺すであらう、今我が諸生に教ふるも亦此の如く、各々其病に就て諫め勵ますに在れば、之を固執するならば、他日恐らくは人を誤るであらうと申したと、斯ふいふので申します。聖賢が教を立つるは昔より此の如き次第であるのに後

世の人は之を辨へずして、妄りに文字に執着する處から遂に精神を殺すやうになるので申します。基督が「蠅を漉出して路駝を呑む」と申されたのは、即ち文字に拘泥して、些細なる律法を守て、大切な精神を失ふとを申したので申します。故に保羅は文字は殺し、精神は活かすものであるから、文字に拘泥せずして、精神を取れと申したので申します。傳道書記者は「多く書を造れば竟なし、多く學べば体疲る、事の全体の歸する處を聞くべし、云く、神を畏れ、其戒を守れ、是は凡ての人の本分也」と申しましたが、私どもの先づ心得べきは「事の全体の歸する處」、即ち精神を會得するとであります。基督教品性の求むる義とは即ち此精神で文字の末で申させ

活す』と申しました。又基督はパリサイ人の小事に矢筈しくして、大事を疎にするを誘りて「蠅を漉出して駱駝を呑むものだ」と申されましたが、是は誠に面白い言で申ります。王陽明傳習録の序に斯ふいふことが書いてある。王陽明が其門人が私かに陽明の言を録するものありと聞て、之れに申すには、聖賢の人を教ふるは宛も醫が薬を用ゆるが如きもので、皆病に由て方を立て、其虚實、温涼、陰陽内外を酌んで時々之を加減するので、要は病を去るに在るのである、若し一方を拘執せば恐らくは人を殺すであらう、今我が諸生に教ふるも亦此の如く、各々其病に就て諫め勵ますに在れば、之を固執するならば、他日恐らくは人を誤るであらうと申したと、斯ふいふので申ります。聖賢が教を立つるは昔より此の如き次第であるのに後

世の人は之を辨へずして、妄りに文字に執着する處から遂に精神を殺すやうになるので申ります。基督が「蠅を漉出して路駝を呑む」と申されたのは、即ち文字に拘泥して、些細なる律法を守て、大切な精神を失ふとを申したので申ります。故に保羅は文字は殺し、精神は活かすものであるから、文字に拘泥せずして、精神を取れと申したので申ります。傳道書記者は「多く書を造れば竟なし、多く學べば体疲る、事の全体の歸する處を聞くべし、云く、神を畏れ、其戒を守れ、是は凡ての人の本分也」と申しましたが、私どもの先づ心得べきは「事の全体の歸する處」、即ち精神を會得するところであり、ます。基督教品性の求むる義とは即ち此精神で文字の末で申りませ

第三に基督教品性の求むる義は消極的でない、積極的であるといふとです。夫の故福澤諭吉先生は三田の聖人とも云はれた人で、明治の徳行家でふりましたが、曾て『己は未だ曾て虚言を云つたともなければ、人の物を盗んだともない、又人を殺したともないから、己には別に宗教を信するの必要はない』といふやうな事を申しましたが、ふりましますが、世の道徳は兎角消極的に止り易いのです。けれ共基督教徒たる品性の求むる道徳は單に消極的でない、積極的です。雅各は斯ふいふて居る、『人善を行ふ事を知りて之を行はざるは罪也』惡をなすのが罪である許りでない善をなさいるのが罪であるのです。故に私共は基督教徒として日々惡をなさぬといふと許りでは不十分であります、進んで善をなさなければならぬのです。夫の有名なる

天文学者のハーシエルが嘗て其朋友に向て、『我等が死ぬる時には、生れて来た時よりも、幾分か世の中を善くして死なうではないか』と云つた精神は基督教徒の心を顯はしたのです。どうか私共は毎日毎日少しづつなり共人のため、世のため、神のために善事をなして、小は一人一家、大は一國一社會を幾分なりとも善くして後此世を去るやうに致したいものであります。

最後に『饑渴如く』と申してふりますが、饑渴といふものは私共の最も強い欲求であります。基督教徒としては、以上述べたる義を求むるために最も強き欲求をもたねばならぬといふのです。飢渴といふものは飲食すべきものを得ざれば満足するを得ざるが如く、靈魂は義に非ざれば満足するを得ません。黄金が如何程貴くても



活動を申したので、之を『愛ある者』と解釋して宜しいのであります。故にジョン、ウエスレーは此意義に於て之を解釋し、使徒保羅が哥林多前書十三章に述べた言を以て最もよき註釋であると申しました。私もウエスレーに従て、哥林多前書十三章を此言の註脚として、最も大切なる基督教品性の要素に就てお話し致したいと思ひます。

フレデリツキ、ロポルトソンは此哥林多前書十三章が約翰の筆に依りて記されずして、保羅の筆に依りて記されたるは最も注目すべきとであると申しました。約翰は愛の使徒と云はれた人で、『神は愛也』この事を我等に教へたのは即ち約翰です。然るに保羅は信仰の信徒で、其最も重を置いたものは信仰であるのみならず、彼の品性に於

て最も卓越せるものは、其最も強き信仰であります。勿論保羅にも最も美麗なる柔和なる性情が備はつて居つたので、保羅の品性の此方面は其經驗の進むに従ひ、漸次進歩したるとは私共の見る處であります。兎に角彼は曾て其信仰の爲めには反對者を捕へ之を獄に投じ、若しくは之を殺すを以てよしとしたるもので、其手は曾て血を以て染められたるものです。然るに彼が曾て血に染みたる手を以て此書翰を記したといふとは——自己の品性に於て最も卓越せるものは信仰なるに拘はらず、愛を以て凡ての賜の中最も優れる者として、『假令山を移す程なる凡ての信仰ありと雖も、若し愛なくば數ふるに足らざるもの也』このことを明言したと云ふとは最も注目すべき事であります。使徒彼得は熱心を以て稱せられたものです、彼は一

個の熱情漢であります。然るに彼も亦基督教品性の最も大切なるものは愛也との事を認めました。故に其書翰に於て「何事よりも先づ互に篤く相愛するをすべし」(彼前四の八)と申しました。此の如く凡ての使徒が此點に於て一致する所以のものは、愛は基督教徒の品性中最も大切なる要素であるからであります。

教授ドラモンドは『世界最大のもの』といふ書物に於て、愛の大切なるを論じて居りますが、彼は哥林多前書十三章を三部に區別致しました。第一は愛と他物との比較で、第二は愛の分析、第三は愛を以て最大のものとしての結論です。保羅は初めに於て先づ愛を他のものと比較致しました。第一は雄辯です、愛なき雄辯は鳴銅や響く鉦の如きものであります。第二は預言、第三は凡ての奥義と學

術に達する事、第四は山を移す程の信仰であります。假令此等のものが備つて居つても愛がなければ數ふるに足らぬのです。次には慈善、次には犠牲でありますが、是れ又愛より出づるに非ざれば無益であると申して居ります。此の如く愛の凡てのものに愈れるを論じて、其所謂愛とは如何なるものであるか、之を分析して示したのであります。私が述べんとする所のものは主として此分析であります。先づ第一は『寛忍』であります。『愛は寛忍をなし』と申して居ります。寛忍とは人の弱さを忍び、人の無學を忍び、人の過失を忍び、世の人の罪と惡とをさへ恐ぶのであります。『天の父は善者にも惡者にも日を照らせ、義者にも不義者にも雨を降らせ』と基督の仰せられた如く、我等は凡ての人に對して寛忍大度の心を以て之を忍ぶ、

是が愛でふります。私共が此世を渡るに於て誤つて居る事の一は、何でも己の信ずる如くに人にも信せしめ、己の行ふ如く人にも行はしめんとし、其意の如くならざる時は之を輕蔑し、若くは之を迫害せんとするに於て是は基督教徒に於て稍もすれば陷り易き誤りであります。保羅が基督教徒を迫害したのは即ち是であります。彼は當時信ずる事を行はん爲めには血を流してもよいと思ふたのであります。けれ共彼は基督を認めて其非を悟り、信仰より愛の方が大切であると云ふ事を知つたのであります。今日でも基督教徒の中には狹隘にして人の説を忍ぶとが出来ない、人の過を忍ぶとが出来ない、之を迫害せんければ快からず思ふ者がありますが、是れ畢竟自己の信ずる處の大切なるを見て、愛の更に大切なるを知らぬからであります。

次には親切であります。邦譯には『人の益を謀る也』と譯してふりますが、即ち親切であります。前の寛忍は受動的であります。親切は活動的で、即ち私共が進んで人の益を謀るのです。親切に言の親切があり、行の親切がふります。言の親切とは私共が親切な柔しい言を以て人を慰めるのです。どうでふります、私共は人に遇ふときに楽しい事を話ませうか、又は不快な事を話ませうか、其人に取て愉快な事を話ませうか、將た不愉快な事を話ませうか、其人が私共と分れる時よい心地がする事を話ませうか、又は悪い心地がするやうな事を話ませうか。或人は斯ふいふ事に無頓着でふります。けれ共親切があれば斯ふいふ點にも注意すべき等で

あります。又行爲の親切とは行爲を以て人を助け慰むるのです。私の一人の友達が曾て私と共に道を歩いて居る時、道の中央に大きな石のあるのを見て態々之を他に運んで参りました。是は小さな事でありませんが行爲の親切です。又他の友達は汽車に乗て旅行する時何時でも、重い荷物をもつて居る老人や婦人に手を貸して之を助けてやります。是も行爲の親切です。道の真中を横行濶歩すれば人力車や自轉車の邪魔になる事を思ふて必らず左側を往くといふやうにするといふも行爲の親切であります。心に愛あるものは其愛が發動して斯る親切となるのであります。

次には『愛は妬まず』であります。保羅は他の處に「悲む者と共に悲み、喜ぶ者と共に喜ぶべし」といふてあります。悲む者と共に悲

むは必ずしもむづかしい事ではないが、喜ぶ者と共に喜ぶはむづかしい場合がムります。例之私共の朋友が榮譽利達を得るといふ場合に、却て之を妬むといふやうな事があります。私共の近親、或は同職、或は同輩が出世する時には之を妬むといふやうな事があります。誠に悲しむべきとではありますが、どうも斯ふいふ卑劣の性情が屢々動き易いのでムります。私共が此點に就て最もよき模範となすべきはパプテスマの約翰であります。其弟子が來りて「ラビ視よ、爾と共にヨルダンの外に在りて爾が證せしものパプテスマを施すに皆彼に來れり」と云ひし時、答へて「人は天より賜ふに非ざれば受くると能はざる也、我はキリストに非ず、唯其先に遣はされし者なりと言ひしとを證する者は爾曹也、新婦をもてるものは新郎



也。新郎の友立ちて其聲を聞かば之に依て喜多し、我今此喜満つるを得たり、彼は必ず盛になり、我は必ず衰ふべし」と申した其心の潔白にして一點嫉妬の念なき處、實に私共の模範とすべき處であります。

次には「誇らず」といふとでありますが、ウエスレーは寧ろ是は「輕しく判かず」と譯した方がよいと申しました。例之爰に或人が何か悪事をなしたりとて非難せらるゝ場合に、或人は之を聞いて直ちに信じます。而して自分も亦之を攻撃致します。是は愛の行であります。人の一言を聞き、一行を見、若しくは唯一面識あるのみで、直ちに其人を判断するといふとは大早計であります。況して人の評判、甚しきは反對家の讒謗を聞いて直ちに判断を下し人を罪するとい

ふ事は、決して基督教の品性を備へて居る人の爲すべき事ではありません。故にもし人の悪しき事を聞く場合には、二人以上の正直な證人があつて、慥に悪事をなしたといふことが定まる迄は信してはならぬ。凡て事には二方面があるものです。故に二方面を較べて質して見る迄は、一方面のみを信してはなりません。而して若し又罪があることが分つたならば、可及的寛大に之を處するのが愛の道であります。

次には「驕傲らず」です。驕傲とは自らを人の上に置き、他を輕蔑するのでありますから、人に不愉快を與へるのであります。愛は之に反して謙るのです、人の僕となるのです。驕傲るものは指一本をつけて人を助くとも出来ません。けれ共謙る者は弟子の足さへ洗

ふのです。故にもし私共が真に謙るならば人の爲めに下駄を直してやる事も靴を磨てやる事も出来るのです。

次には『非禮を行はず』です。禮義を守るといふとは人と交際するに於て欠く可らざる事であります。基督教は素より人類の平等を認むる者であります。社會の秩序をなみする者ではありません。既に社會あり、是に於て上下、貴賤、男女、長幼の別があるのです。既に此等の別ある以上は共間に禮儀なるものがなければならぬのです。而して此禮儀なるものは愛より出づるのです。長上の心を喜ばせんとして愛に彼等を尊敬するのです。弱きものを愛するより愛に婦人小兒を助くるのです。朋友を愛するより愛に彼等に譲るのです。人の多く集まれる席上で人の感情を害するやうな事を語らぬやうに心掛けるといふも、つまり彼等を愛するからです。此の如く愛あるものは非禮を行はぬ事になるのであります。

次には『己の利を求めず』といふとで、一口に申せば身勝手をせぬと申すことです。人の利益よりも己の利益を謀るといふのは即ち身勝手で、愛の道に適ひません。愛は與へるのです。基督が與ふるは受くるより福也と申された言の眞意の了解し得らるゝ人が愛ある人です。あります。

次には『怒らず』と云ふとであります。愛に『容易く怒らず』と譯してありますが、原文には『容易』の文字がありません。保羅の意は更に怒らないのです。私共は怒るとを以て、私共の弱さより起る次點として左迄悪いと思つて居りません。けれ共聖書は怒を罪

してムります。基督は「凡て其兄弟を怒る者は審判に與らん」と申されました。其所にも譯文には「故なくして」の文字がムります。が、原文にはやはりないので。基督教的品性は更に怒らぬのです。故なきに怒り、若くは容易に怒るは素より基督教的品性のなき人です。ムります。

次には「人の惡を念はず」と云ふとでムります。言を換へて云へば人を信するのです。人の動機を疑はぬのです。人の心をわるく取らぬのです。然るに世の中には兎角人の心を悪く取り、悪いやうに許り推察して人を悪人にするやうな人も少くないのです。此の如きは素より基督教的品性ではムりません。

保羅は尙進んで愛の分析を續けましたが、今私は之にて終ります。

どうか私共は以上の説明に依りて各自ら願ひ、此大切の品性を養ふやうにしたいものです。之を養ふは實行に在るので、先づ卑近より始めるのです。而して基督は常に私共の模範でムります。ドラモンドは若し私共が三月の間一週一回哥林多前書十三章を讀み、其後三月の間毎月一回宛之を讀まば私共の生活が一變するのであらうと申しましたが、屢々此書翰を讀むのも私共の愛心を養ふ一助でムります。

(七) 清き心

心の清き者は福也、其人は神を見るを得べければ也、

(馬太五の八)

基督教の品性第六の要素は清しといふとであります。基督教の道德が他の道德に異なる特點の一は、此清きといふとに最も重を置くとであります。昔者希臘人の説いた道德は立派のものであつたが、清潔と云ふとはソクラテスの教の中にも、アリストートルの教の中にも説いてはない。儒教の中にも、佛教の中にも特に清潔といふとに重を置いてはない。此等の宗教道德の欠點は實に清潔といふとに重を置いてないといふとであります。猶太に起つた宗教の特異の點の一は此清潔に非常に重を置いて居るといふとであります。試に舊約を緝て見るならば、エホバなる神は聖き神であると云ふ事を發見す

るであります。『聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、万軍のエホバ』とは猶太人が其神を讚美崇敬した言であります。此聖なる神は彼を拜む人々に向て亦聖ならん事を求め玉ふた。故に云く、『我れ聖ければ爾曹も亦聖くすべし』と。若し美と云ふとが希臘人の傳へた福音であつたとなするならば聖といふとは希伯來人の傳へた福音であります。希伯來人は聖といふとを離れて神を見るとは出来なかつた、從て又聖といふとを離れて人を見るとも出来なかつたのです。神は聖し、故に我も亦聖からざる可らずとは、實に猶太宗教の眞髓であります。

基督教は舊約の宗教から發達した宗教でありますから、隨て又清潔といふ點に最も重を置いてあります。保羅が書いた羅馬書は、素

より基督教の教理を組織的に説かんとため書いたものではありませ  
 ん。けれ共保羅は此書に於て福音の大綱を示して、福音が人を救ふ  
 とはごういふとであるかといふとを論理的に説いて云ります。今其  
 順序を云つて見れば、人は基督を信する信仰に依て救はるゝのであ  
 る之を義とせらるゝといふ。義とせられたるものは神と和ぐのであ  
 る。神と和いだものは聖潔に進むべきものであると申すので云りま  
 す。

『爾曹其肢体を献げて汚穢と惡の僕となり、惡に至りし如く、今又其  
 肢体を献げ義の僕となり、聖潔に至るべし』(六の十九)とは即ち救  
 はれたるもの、當然達すべき道を申したので云ります。換言すれば  
 基督教の救といふのは之を神との關係から申せば罪より赦さるゝと  
 で、之を道德的の状態から云へば罪を離れて清潔の道に進むので云  
 ります。

故に清潔と申しますれば、凡ての罪より潔めらるゝと云りますが、  
 今私は諸君と共に實際上の教訓を得んため二三の事に就て、清潔  
 とは何ぞやとの事を學んで見たいと思ひます。

先づ第一、一點私慾の念がないと申す事、是は即ち基督教品性の要  
 素なる清潔の求むる處で云ります。公明正大で自ら私する處がな  
 い所謂光風霽月の如き心、若くは玲瓏玉の如き心、是れが即ち清  
 潔で云ります。自ら良心を欺かない、思ふ如くに語り、感ずる如く  
 に話す、是れが即ち清潔で云ります。所謂無邪氣と云ひ、所謂天真  
 爛漫と云ふ、即ち清潔の謂で云ります。昔キリストはナタナエルの

己が所に來るを見、之を指して『視よ、眞のイスラエルの人にして、其心詭譎なき者』と申されたと云ふとで、心詭譎なき者と申すのは即ち心の清き有様で、人の心には偽の多き者で、故にエレミヤは『心は萬物よりも偽る者にして其惡し』(十七の九)と申しました。此詭譎の心より免れて眞實の心を持ち、眞實の語を語る、是れがキリストの所謂眞のイスラエル即ち眞のクリスチャンで、眞實と申すのに三種ある。第一は事實の眞になると、第二は心の誠實になると、第三は言の簡明になるとあります。此三者の揃ふて居る有様が清きと申すのであります。次に清潔といふのは貪慾の心を去るのです。私共は兎角貪る心があるもので、之れが事に觸れ折に觸れて顯はれます。例之私共は

飲食を適當に節することが出来ない。或は食を貪り、或は酒に酔ふとを致します。諸君は之を些細なる事であると申しますか。否、そうでない、其關する處は唯に口腹のみでない、心の清からざるより起るのですから、其關する處至大であります。次には金錢を貪ることで、今日私共が非常に歎息致します事は、人々の心が皆利に向ひ、金錢上清潔を守ることが出来なくなつて居ると云ふことです。曾て米國の或雜誌社からグラットストーン翁の許へ書を贈て、一字に就き一弗を報酬として差上げるから何なりとも寄稿をして戴きたいと申し送りましたが、具翁は答へて余は金錢の爲に文字を弄するものではないと云て断つたといふとであります。又マツキンレーは嘗て人に語つて、余の生涯に於て最も耻辱に感じたりしは余が國會議員たりし時、

或任命をなしくれよとて數千金の賄賂を贈られし時であつたと申し  
 たと云ふとです。清く尊き心には金錢に依りて事をなすと思ふさ  
 へ墮落の極度の如くに感ずるのです。次には男女間の關係でありま  
 す。基督教は一夫一婦の制度を嚴守するものであるこの事は申す迄  
 もないが、是は勿論男女に通じて申すのです。而して又公然夫婦と  
 ならなければ決して夫婦の交をなすべきものでない、聖書の中に戒  
 めてある苟合と云ふのは即ち之を云ふのです。又聖書には好色をも  
 戒めてある、凡て是等は皆不潔の生活であります。支那の聖人の言  
 にも少き時は血氣壯也、之を戒むる色に在りと申してムります。私  
 は青年男女の諸君が最も嚴に之を戒められんことを望みます。私  
 併し清き生活は先づ心を清くするに非ざれば出來るものでない。世

には境遇さへ改むれば人は清くなるかの如く思ふ人があります。勿  
 論境遇を善良にするといふとも大切です。けれ共境遇のみ善くとも  
 人は清くなるものでない。同じく是れ冷なる空氣であつても、健全  
 の人は之に依て益々身体を壯健ならしめ虚弱の人は却て寒胃に犯さ  
 れます。均しく是れ滋味ある食物なれ共或人には滋養を與へ、或人  
 には胃弱を起させます。此の如く同一の境遇でも其人に及ぼす影響  
 は其人の状態に従つて違ふのです。故に賢しき醫者は氣候や天氣  
 を改むる爲に實行も出來ぬ様な理論を考ふるとは致しません、病人  
 の状態を考へて其中より起る病源を除かんとを勤むるのです。基督  
 は賢き靈魂の醫者です。故に彼は先づ人の病源に溯り之を除くの  
 です。神の國は爾曹の衷に在りと申されたのは即ち是れで、神の國

は心に在る、心が神の國となれば世界が神の國となるのです。ミルトンが心は天國を造り又地獄を造ると申したのは同じ道理です、新人は新天地を造るのです。

保羅は『清き人には凡ての事皆清し』と申しました。是は甚だ味ある言で、先づ第一此語に依て心の清き者は神を見るときを得べしこの言を解釋することが出来る。宛も色眼鏡をかけて物を見れば物は眼鏡の色の如く見ゆる様に、心の汚れた人は其心で人を推すから清き人の心は分らない。世の中には随分人の心を悪く邪推したり、又よく不平を鳴らす人がありますが、斯ふいふやうな人は其心が曲つて居るのでありますから、どんな善い事でも悪く見え、どんな清き事でも不潔に見ゆるのです。私共が真に神を了解するとの出来ぬといふ

も同じ事で畢竟心が汚れて居るからです。故に私共は神を了解し、人を了解する爲に先づ心を潔くせんければならぬのです。又私共は心さへ清ければ汚れた物を見ても、汚れた聲を聞ても汚れた境遇の中に在ても尚清き生活をなすことが出来るのです。例之戀愛文學を讀みましたからとて、裸体畫を見ましたからとて、それで汚れた情を起すものではない。伊藤仁齋といふ儒者が嘗て花街を過ぎた時、或娼家が強て仁齋を引て樓上に慰はしめ茶菓を饗した。仁齋は家に歸て其弟子に向て、今の世善を樂み施を好むと此の如き者あらんとは圖らざりきと申したといふ事でありますが、心さへ清ければ假令黄金が前に横はるも、権力が後に待つも、美色、美聲が我を誘惑するも更に恐るゝに足らぬ、悉く是等の者に勝ち得て餘りあるのです。



之に反して心もし汚れ居るならば假令淫靡なる文學、卑猥なる音楽なきも墮落するのです。故に我等到る處に潔からんと欲せば先づ心を潔くせんければならぬのです。

且心清ければ雷に誘惑に勝つのみではありません。自己の遇ふ所の事物をも人をも清くするのです。基督が曾て税吏長ザリカイの家に寓られた時、ザリカイと其家の者は一夜の中に罪を悔ひ改めて、貪慾飽くを知らざる者が慈善家になつたといふ話が福音書に記してあります。是は清き人の感化を述べたのです。心清ければ誰でも此の如き感化力を有するのであります。

此の如く心清ければ清き者を了解する事が出来る、到る處に清潔を保つと出来る、又自己に近よるものを清むる事も出来るのです。此の如き有様に在る、是れが即ち基督教的品性の要する清潔です。

(八) 神の子は争はず

和平を求むる者は福也、其人は神の子と稱へらるべければ也

(馬太五の九)

爰に和平と申してある言語に二の意味が与ります。一は神と人との調和で即ち神を信じて得る處の平安であります。他は人と人との親睦で相互に睦くすると云ふ意味で与ります。聖書には此二の意味に於て此和平といふ言を使用して与りますが、爰には前者の意味に非ずして後者の意味で与ります。

和平を求むる者は神の子と稱へらるゝを得と申して与ります。意は和平を求むるは神の性質に最も近き性質であるといふのです。神は争を好む神でない、神は平和を愛する神で与ります。基督がベツレヘムでお生れになつたとき衆の天軍が顯はれて天の使と共に神を

讚美て『天上には榮光神に在れ、地には平和、人には恩澤あれ』と歌ふたといふとです。基督の此世に降られたる究竟の目的は即ち神と人との間、人と人との間に平和を興へんがためです。基督の所謂神の國と申すのも畢竟天上天下に平和を來すの謂に外ならぬのであります。故に聖書の中には屢々此平安といふとを説いてある。人と人との間の親睦に就て屢々勸めてあるのです。基督教徒とは即ち此精神を會得して勉めて人と睦み和ぎ、而して此世の中に平安を來す爲に熱心に祈り、又此くの如く働らく人を申すのであります。和平を求むるといふのは、先づ第一自ら人と争はぬのであります。次には人の争を止めるのです。人と人と争て居る場合に之を調和して其争を止むる工夫をするのです。第三には國と國との争

を止むるやうにするのです。戦争といふやうなものを全く此地上より絶つやうにするのです。勿論今日の如き時代に在ては絶對的に戦争をなくすといふとは甚だむづかしきことです。今日は眞理の爲に若しくは大なる和平を保つ爲めに戦争をする必要も与ります。故に戦争を止むるやうにするといふのは今日では單に理想に止まつて居るのです。けれ共神の子たる基督教徒は常に此理想の一日も早く實行せられんとを祈らなければならぬ。夫の萬國平和會といふやうなものも即ち此目的より出來たものです。此目的は今日直ちに實行されんでも神の子たる者が多くなれば、又神の子たるものが眞に神の子たる精神をもつやうになれば遂に實行せらるゝ時が來るのです。併し私共は常に斯る時機の早く來らんとを祈りたいものです。

唯今私共がお互に學びたいと思ふとは先づ私共自らが人と争はぬやうにしたいといふとです。私共が家の人と睦み和ぐとの出来ぬ前に、私共が朋友と睦み和ぐとの出来ぬ前に、私共が同じ信仰をもつて居る教會の中に所謂兄弟姉妹と稱するものと睦み和ぐとの出来ぬ前に、國と國との争を避けやうとするのは前後本末を失して居るのです、故にどうか私共は自ら人と睦み和ぐとを勉むるやうにしたいものです。どうしたならば私共は人と睦み和ぐとが出来ませうか、是が大切なる問題であります、此問題に答へんとせば先づ何が故に私共は人と争ふのであるかと問はなければなりません。人と争ふ原因を除くのは人と睦み和ぐ道でムります。先づ第一私共が人と争ふのは一家に在ても、朋友の間に在ても他

人との間に在ても、自己の利益を求むるからでムります。自己を中心として自己の立場から自己の利益のみを謀らんとする、是れが多くの争の原因であると思ひます。所謂利害が衝突するといふとが多くの争の原因となつて居ります。法律に訴へて居る訴訟から、相互間の不和に至る迄其の多分は利害問題から來るのでムります。故に私共は人と睦み和がんとするならば、此利害問題を先にするといふ考を全く取除かんければならぬ。自分の利益のみを謀るといふ考を全く除去せんければならぬ會て或人が兄弟と父の遺産を争ふて基督の許に來り『師よ我兄弟に遺業を我に分てよと云ひ玉へ』と申しました。基督は其時答へて『人よ誰我を立て、爾曹の裁判人、又物を分つ者となせしぞ』と云ひ而して衆人に向て、『戒心して貪心を慎

めよ。夫れ人の生命は所蓄の饒なるには由らざる也」と申されまし  
 た、(路加十二の十三—十五) 基督は争の裁判官となるを欲し玉はな  
 い、直ちに其争の原因に溯り玉ふたのである。即ち貪心、之が争の  
 原因です。人の生命は所蓄の饒なるに由らざることを辨へずして、妄  
 りに自ら貪らんとする、之が争の原因でふります。曾てアブラハム  
 其甥ロトと共にベテルと云ふ處に至り、爰に住むたりしが、彼等其  
 所有多くなりしに従ひ、地狭隘にして共に居ると能はず、是於アブ  
 ラハムの家畜の牧者とロトの家畜の牧者の間に争がありました。其  
 時アブラハム、ロトに向ひ、『我等は兄弟の人なれば請ふ我と汝の  
 間及び我牧者と汝の牧者の間に争あらしむる勿れ、地は皆爾の前  
 にあるに非ずや、請ふ我を離れよ爾もし左に往かば我れ右に往かん

又爾右に往かば我左に往かん』と申しまして、ロトの撰ぶに任せ、  
 豊饒なるヨルダンの低地を悉く彼に與へ自らは比較的瘠せたるカナ  
 ンの地に住みました。彼は自ら豊饒の地を取らずして瘠せたる地を  
 取つて、争を避けたのです。此アブラハムの精神は即ち基督の所謂  
 『凡て人にせられんと思ふとは爾曹又人にも其の如くせよ』と申され  
 た精神です。此精神を養ふことが人と争ふとを避けて人と睦み和ぐ道  
 であります。次に私共が人と争ふ理由は他人をも己と同じやうに  
 しやうとするからです。自分と同じ性質、自分と同じ習慣、自分と  
 同じ説、自分と同じ信仰をもつやうに人を強いんとする處より争が  
 起るのでふります。柳は緑、花は紅、様々の性質があり、様々の習  
 慣があつてこそ世の中はうまく調和して往くのです。然るに自己と

異なるものを賤しめ、輕蔑し、強て自分と同じやうにさせんとするのは誠に誤つた考です。此考があるから家の中が調和せぬ、人と人との間が圓滑を欠くのです。所謂人を恕するといふと。大きな心を以て凡ての物を容れてしまふといふのが神の心です、神の子のするとです。人の説、人の信仰に關しても左様でムります。勿論私共は人が誤つた考をもつて居れば之を正してやらなければならぬ。間違つた説はどうしても打破らなければならぬ。又私共は自己の信する處を述べて、人にも之を信せしむるやうにすることが必要でムります。けれ共爰に私共の深く注意せんければならぬとは、私共が自ら信する處に忠なるが爲め、固執、偏見、頑冥、狹隘に陥らないうやうに心掛くるといふと下ムります。妄りに人の説を誹り、人の

信仰を排撃して之を倒さずんば止まずといふやうにすると必らず争が出来るので。勿論眞理を主張する爲には争も避く可らざる場合がムります。基督の仰せられた通り私共は眞理に忠ならんが爲めには親ども兄弟ども争はなければならぬ場合がある。けれ共是は必至の勢止むを得ざる場合を申すので、固陋、頑冥の見を以て争ふべしと申すのではない。宗教家又は宗教信者と申すものの中には随分争を好む者がある、所謂異端征伐を以て快とする者がある。で基督教の歴史にも此例が甚だ少くないのでムります。けれ共異端征伐に依て利益を得たといふ例は決してないのである。眞理は争はずして自然に明になるのです、固陋、頑冥は何時でも眞理の妨となるのです。教會の争論は何時でも教會の進歩を害するのです。

大切の信仰に於て尙然り、況や些細なる儀式や、若しくは感情の衝突から信仰を一にするものが相争ふといふとは神の子たるものに不似合のとであります。故に私共は如何なる場合にも、保羅の言、即ち「なし得べき所は力を盡して人々と睦み親むべし」と申すことを忘れてはならぬのです。

最後に私共は惡に敵してはならぬのである。基督云く、「我れ爾曹に告ん、惡に敵すると勿れ、人汝の右の頬をうたば、亦他の頬をも轉らして之に向けよ、爾を認へて裏衣を取らんとするものには外服をも亦取らせよ、人汝に一里の公役を強なば之と共に二里往け」と。和平を求むるとは此惡に敵せざる精神と行爲とを云ふので、是れ實に最も神の性質に近似した性質です。神の子と稱へらるゝに足る資

格であります。人に於て最も貴いのは唯自分の爲すべき義務を盡すといふとでふりません。なすべきが故に爲したといふのは當然のことです。敢て貴き心として稱賛するに足らぬのでふります。けれ共更に惡に敵せない、人右の頬を批たば更に他の頬を向けて批たしむるといふとは實に貴き心です、貴き行爲です。而して是れ實に人と和く道でふります。人は奇妙なもので如何に激して居りましても、こちらが左程激せぬのみならず、却て温言を以て之を柔ぐる様に致しますならば抵抗する張合が抜けてしまうものです。夫の水師提督ペルリが始めて浦賀へ参りました時、幕府から軍艦へ談判に出かけた役人は一刀兩斷に彼を斬るといふ下心で参つたのだそうです。然るに此役人が軍艦に参りますと、一人の男がにくくして丁

寧に挨拶して一の室に迎へました。役人はペルリは何處に在るか尋ねました處が、其人は答へて私が其ペルリである、よく来てくれたといふて温顔を以て之に接した。こちらから參た役人等は氣拔がして斬るところの騒でない、却て非常な厚意を以て歸て來たといふとであります。こちらが斬るといふ心でしたから、彼方でも斬るといふ心ならば必至愛に一場の活劇を生じたのでムリませうが、流石は神を信じて居るペルリでムリますから、温顔を以て却て敵を降服させたのです。此の如く彼が敵意をもつて居るから我も敵意を拵むといふならば到底和睦は出來ないのみならず、激しき争を來すより外はないのです。けれ共私共は惡に敵せぬ、却て右の頬を批たれた時、左の頬を向くるといふやうに致しますならば争は止まるので

す。老子が弱よく強に勝ち、柔よく剛を制すと云ひ、日本の諺に負くるは勝といふも之を云ふたのでせう。パウロは善を以て惡に勝てと申してあります。人と和ぐ道は實に是です。

終に臨て私はトルストイ伯の言を引きたい。彼云く「余は嘗て猶太教の教師と共に馬太傳一章を讀みつゝありしに、一句を讀む毎に彼云ひけるは、其句は舊約聖書中に在り、其句はタルマツトの中に在りと、而して彼は此二書より山上の教訓に類したる句を余に擧示したりき、然れ共余等が讀で『惡に敵すると勿れ』との句に至りし時、彼は其句はタルマツト中に在りとは云はざりし。余は此句が舊約書又はタルマツト中に在りや否を問ひしに、彼は否此の如き語は更に見當らず、併し基督信徒は果して此教訓に従ひつゝありや、果し

て左の頬をもめぐらしつゝありや、願くは之を語り玉へと答へたりしと、『惡に敵する勿れとは是れ實に基督教に於てのみ發見すべき教訓にして、基督教徒の品性のみに有すべきものであります。けれ共私共は果してしかなしつゝありや、是れ實際問題として私共の深く考ふべき事であります。

(九) 義人の受くべき運命

義しきとの爲めに責めらるる者は福也、天國は即ち其人のものなれば也、我がために人爾曹を詬誶又迫害、いつはりて各様の惡言をいはん其時は爾曹福也、喜び樂む天に於て爾曹の報賞多ければ也、是は爾曹より前の豫言者をも斯くせめたりき、

(馬太五の十——十二)

基督教徒たる品性の要素は既に説きたるが如くであります。此等の要素を有する品性の受くべき運命は何でありますか。鳥渡考へますと、此等の立派なる要素を有する品性は世人の稱讚を得、尊敬を受くべき筈であります。世の實際に於てはさうでありませぬ。世界が悉く基督教化したる曉はイザ知らず、今日の實際に於ては却て反對の事實があるのです。基督は能く人性を了解して居られます、故に爰に基督教徒の受くべき運命に就て述べ玉ふたのであります。



基督教徒の受くべき運命とは即ち迫害です。基督教徒の生涯は迫害の生涯で、基督教會の歴史は迫害の歴史であります。基督教が如何に當時の人に取扱はれ玉ふたかといふとに就ては殆ど云ふの必要がない。其使徒等も基督と同じ運命を受けたので、當時の信者等も同じやうに迫害を受けたのです。ニローやドミシヤン帝の時に、羅馬の基督教徒が受けた迫害は實に非常のもので、私共は之を聞くさへ戦慄するを覺ゆるのです。爾來今日に至るまで千五百年間基督教は何處の國へ参りましたも同一の運命を受けたのです。我國へ初めて基督教の傳はつたのは今より凡そ三百年以前でありますが、やはり同一の運命に出逢つたので、我等の先祖たる基督教徒は初代の基督教徒に劣らざる迫害を受けて之に堪えたのです。我國三百年前の基督教

徒の事に關しては、日本西教史に委はしく記してありますが、今其の一二の迫害に就てお話し申しませう。我國で最初の殉教者は一人の下婢でありました。此女毎朝十字架の下に往きて神を拜するを例として居りましたが、其主人は佛教信者なるより、之を見て他出を禁じ、且再び彼所へ往かば殺すべしと申しました。彼女は毫も恐れず、答て、妾は死を恐るゝがために基督教を奉せしには非すと申しました。主人大に怒り其再出を窺ひ、之を歸路に要し刀を取て進みました。女之を見て地上に跪き手を舉げて天を拜し、領を延て主人の前に出てました。主人は之を一刀の下に斬殺したといふとです。又當時高山右近といふ熱心な信者がありました。豊太閤僧寂印の讒を信じ使を遣はして、汝基督教徒たるを即刻に止めざれば家財、領

地及び職務を剝奪すべしと申遣はしました。使者は右近に勸めて、假りに關白の旨に従へと云ひ、其友も亦斯く勧めましたけれ共、右近は之を聞かず、關白に答へて假令若し我をして百千の生命を有せしめ、皆之を斷つに至らしむべきも決して不信者たると能はずとの事を言上致しました。秀吉聞て大に怒り、其家財、領地を沒收し、之を流刑に所しました。右近は其家族に之を語りしに、父飛彈守は喜で、假令此流刑の外に尙千百の不幸生じ來るとも宗教の爲めなれば全家欣然として之を受けんと云ひて、手を揚げて天に向ひ、日本の基督教徒多き中に我家を撰で、信心堅固の模範となさしめ玉ふと深謝に堪ぬざる所也と云ひて、神の恩恵を感謝し、其子の頸を抱き感涙を流して其幸福を祝し、且申すやう、我兒よ、我家に在る所

のものは信教の爲めに今凡て烏有に歸したりと雖も、尙一物の残れるあり、一死以て上帝に報いんとする願望是也と。天上の榮華を棄て忽ち地獄に陥りたる如き此大難に際し、父子夫妻毫も怨恨悲歎するとなく、相互に歡喜の涙を垂れ、老幼男女各々一箇の行李を携へて路に上り、途上讚美歌を唱へて配所に赴いたと云ふ事です。是は唯一二の例でありますが當時の基督教徒は何れも斯の如き迫害を蒙り、或は獄に投せられ、或は配所に遷され、或は家財を沒收せられ、或は斷頭場裏の露と消えたのです。新教の初めて我國に傳はつたのは四五十年前の事でありますが、新教の信徒も随分迫害を受けたのです。其中には刑場の露と消えたものもあるのですが、然らざるも親に勘當せらるゝとか、親類から義絶せらるゝとか、郷黨隣里から

排斥せらるゝとか様々の迫害を蒙つたものです。是等の事を考へますならば、私共は實に幸福の時代に生れたのです。今日私共は信仰の自由をもつて居ります。再び昔の様に信教の爲めに獄に投せらるゝとか殺されるとか云ふやうな事はない。又今日では基督教の事が漸次世人に了解せらるゝやうになつて来て、迫害と名の付く様な大迫害はないのであります。併し何時の世の中でも基督教徒は全く迫害を受けぬ譯には参りません。今日でも基督教徒であるといふ爲めに、私共は随分人に謗られ、罵られ、擯斥せらるゝ場合もあるのです。是は基督教徒の受くべき運命で、致方はないのであります。

抑も基督教徒は何の爲めに迫害せらるゝのですか。基督教は爰に「義のため』であると申してあります。保羅は『凡て基督耶穌に在りて神を敬ひつゝ、世を渡らんと志す者は窘を受くべし』(提後三の十二)と云ひ、又『肉に循ひて生れしもの靈に循ひて生れし者を窘む』(加拉太四の廿九)と申しました。即ち基督教徒の責めらるゝは神を敬ひつゝ、世を渡るからであります。靈に循て生れ、靈の行をなすからであります。世人の基督教徒を責むるのは彼等と異なるがためであります。

諺に世の中は目暗千人に目明千人と云ふとありますが、實際は目暗千人に目明一人もないのです。故に人間の眞價値といふものは到底世人に了解せらるゝ者でない。試に御覽なさい、世の中にもてはやされる人はどう云ふ人でありませうか。極つまらない人ではあり

ませんか。凡そ何の社會でもさうであります。人望のある人はあ  
 まりゑらい人ではありませぬ。フレデリツキ、ロポルトソンは人望  
 を得ることを非常に恐れたと申しますが、私も人望の二字をあまり好  
 みませぬ。或人が世に名高くなる道は法螺を吹くに在りと申しました  
 が、悲しいかな此言の中には真理を含んで居ります。世の中の人  
 十人の中九人、否百人の中九十九人迄は黙つて居る眞の學者よりも  
 學者ぶる無學者を學者だと考へます。學士だとか博士だとかい肩書  
 で直ちに判断をするものです。故に世の中の人がえらいと思ふ人は  
 案外えらくない人です。その如く世人は心の親切なる人よりも口先  
 の親切なる人を重寶がります。眞に善をなす人よりも、善をなすが  
 如く見ゆる人を善人だと思ひます。眞に親切な人、眞に善をなす人

は到底世人に了解せらるゝとが出来ないので。故に眞の大人、眞  
 の善人、眞の義人は心に孤獨を感じる。夫の耶穌が自分の兄弟にも  
 了解せらるゝとが出来ない、自分の弟子にさへ屢々誤解され、遂に  
 時の人に迫害せられて十字架に釘けられたといふものは畢竟人物が  
 あまり大きく、品性があまり高かつたからです。私共が兎角世人  
 に誤解せられ易い、而して責められ、罵らるゝも同じ理由に由るの  
 です。去らば私共の迫害せらるゝは幸福であると申すのは至當の事  
 であります。

且世人は唯に高尚なる品性を了解せざるのみならず。又之を惡むの  
 であります。基督云く、『世は爾曹を惡むと能はず、我を惡む、彼等  
 の爲す所惡しと我證すれば也』と。高尚なる品性は自然に下等なる

品性の下等なるを顯はすものです。義の生活は不義の生活の不義なるを顯するものです。色の黒い人は色の白い人と並ぶとを好まぬ、身長の高い人は高い人と共に歩くことを好まぬ、比較に由りて己の欠點が顯はれるからです。不義なる人が義人を惡むもの此理であります。支那の歴史杯を讀んで見ると、何時の時代でも忠良の臣と姦臣との争があるやうに記してありますが、凡そ世の中は義と不義との争鬪の歴史であります。去れば基督信徒の責めらるゝのは自己の義を示すので、責めらるれば責めらるゝ、丈自分の人品の高きを顯はすものです。之を思ふならば迫害を受くるは寧ろ福と申さなければなりません。

且私共の標準とする處は見ゆる處のものでない、見えざる處のものでない。一時のものでない、永遠のものでない、將來です。人ではない、神です。支那人の言に、人衆くして天に勝つ、天定て人に勝つと申すところがある、又西人の語に、時代の復讐と云ふところがあります。一時の目から見れば不義が義に勝つ様に見ゆるところがある、是は唯一時の事で、永遠より打算すればやはり眞理が最後の勝利を得るのです。人の稱讃を得るは愉快で幸福の様であります。前申す如く世間は目暗であるのみでない、人の説は時々刻々に變化するもので、『ホザナよ至高處にホザナよ』と呼んだ人も、忽ちに『十字架につけよ、十字架につけよ』と呼ぶやうになるのです。故に私共は人を見ないで神を見、人の稱讃を求めずして神のほまれを求めんければならぬ。迫害は一時の事で、永遠の事でない、

人のする事で、神のなし玉ふ事でない、故に何等心を煩はすに足らないのであります。

今日私共の憂とすべきは迫害のある事よりも、寧ろ其足らざる事でありませう。今日迫害なき一の理由は慥に世の人が基督教を了解する様になつたが爲めであります。基督教徒が世に接近したのも其原因下はありますまいか。世の基督教に接近するは喜ぶべきことではありませんが、基督教徒が世に接近し俗化するは誠に憂ふべき事でありませう。どうか私共は世に近づいて安穩ならんより、世よりも高く潔くして世に責めらるゝ様致したいものです。

(十) 品性の修養

私は既に基督の美訓に就て基督教徒たる品性の八箇の要素をお話し申しました。今結論として此品性はとうして修養すべきものであるかといふ事をお話し申しませう。

先づ第一に信仰に由りて己を神の思想の中に入れ、神の自然の感化を蒙るといふことが品性を修養する第一の道であります。於是世の所謂徳教家が品性を修養する道と、基督教徒の品性を修養する道との間に區別あることを發見せなければならぬ。世の徳教家の品性を修養するは所謂自修鍛練で、自己の苦心を用ゐて自ら鍛練するのです。基督教徒の修養は之に異り、信仰に由りて己を神の思想の中に投じ、

其自然の感化を蒙るのです。生物は其包圍に依りて變化するもの也。とは生物學の原則であります。基督教徒の修養は畢竟神の包圍の中に自己を置き、自然の感化を受けて己れ亦神の如き人となるのであります。使徒保羅が『凡て我儕帕子なくして鏡に照すが如く、主の榮を見、榮に榮いや増りて其同じ像に變る也、是れ主即ち靈に依りて也』(哥後三の十八)と云つたのは即ち之を申したのです。私共は基督に顯はれたる神の榮を見て常に之を仰ぎ、之を學び、其中に呼吸して終に基督の如き品性を造るのです。自ら苦心するのではない。自ら變化するのではない、自然の感化を受けて變化せしめらるゝのです。

於 是祈禱と聖書を讀むところの二は品性を修養するに於て最も大切なる手段となるのです、平生紅塵萬丈の市街に住居するものが、もし郊外山高く水清き靜閑の地に入りますならば。俗氣忽ち消散して氣宇清朗、超然別人間となれるが如き感を生ずるであります。是れ自然の美妙に接して之れが薰化を受くるからであります。之と同じく私共は日夜紛々たる俗事にのみ鞅掌して忙しく働いて居りますならば私共の思想や感情は俗氣に染みて俗物となり了るであります。天父の靈氣と交るときは凡の俗情は消散して、宛も陰雲漠々たる後に皎々たる明月を迎ふるが如き感を生ずるでムりませう。祈禱とは即ち是です。我心靈を地より取りて天に向けるのです、紛々たる俗情を脱して高潔たる心靈と交るのです。此靈通の結果は即ち

私共の靈に自然の感化を與へ、之を高潔になし、自己の意志と神の聖旨とを一致調和せしむるのです。聖書を読むといふのもさうであります。之に依りて神を學び又己を學ぶのです、神の空氣の中に己を投ずるのです。教會の禮拜も、信仰を同ふする人々と共に語る事も宗教的文學、殊に敬虔なる古聖の傳を読み其實験を學ぶ事も、皆神の思想の中に自己を入れて其自然の感化を受くる道であります。要は基督教に於ては自己を神といふ包圍の中に投ずるを以て最も必要な事となすので、苦心なく品性を修養する第一の道は即ち是れであるのです。

乍去基督教の品性は唯祈禱や聖書を読む事等に依りてのみ修養する事の出来るものではない。前申す如く私共は世の中を離れて靜に天の空氣に觸れなければならぬ、神の靈氣を呼吸せんければならぬ。然らざれば私共の心は俗化せられ、世に汚さるゝのであります。併し又之と共に此實際世界も亦私共の品性を修養するに於て大切な場所也との事を忘れてはなりぬ。基督教と他の自修鍛鍊を旨とする徳教との相違も亦茲に在るのです。即ち自修鍛鍊を旨とする徳教は、完全なる品性は實際世界を離るゝに非されは養ふと能はずと申します。基督教の中でも羅馬教の如きは眞正の基督教的生活は唯僧院的生活を送るとによりてのみ遂げらるゝしと教へますが。是は福音の精神ではないと思ひます。基督の宗教は決して遁世教ではありません。出世間的宗教ではありません。勿論世の職業や世の快樂や世の風俗習慣なるものは、人の高尚なる性質を教育せずして、下



等なる性情を教育する力あるもので、夫の倨傲や、自負や空想や、貪婪や、邪情や、悪慾等は此實際世界の私共に教ふる所のものがあります。故に私共は世の中にのみ交て居るならば、全く世に汚さるゝので、於是神の空氣の中へ身を投ずるの必要があるので、併し私共の品性は唯此等のものを避くるとに依りて養はるゝものでない、否寧ろ此等のものと戦ひ、之に勝つとに依りて養はるゝものです。私共が神の空氣の中に身を投ずるといふのは私共が是等のものと戦つて勝つ力を養ふ道で、世の中を遁れる爲めではない。私共が世の中へ出で、職業をなす、世の中と交はる、色々其間に誘惑が来るに相違ない、私共を天上より地下に引き落さうとするやうな誘惑が来るに相違ない。斯ふいふやうな誘惑と戦つて之

に勝つ、於是私共の品格が鍛へられて進歩して往くのです。カライルの嘗て申した言に、『手袋なしには肯て物に觸れざる人の如きは其手清潔なるも稱するに足らず』といふとありますが、誘惑に逢ふたこともなく之と戦つたともない人の品格は、假令清い様に見れても、宛も手袋をして物に觸れないで清潔な手のやうなもので、少しも貴ぶに足らぬのであります。

品性は斷へす。實際に働くに依りて修養せらるゝのです。假之愛は基督教品性の最も大切な要素であります。而して之を養ふは之を實行するに在るので。空想も希望も口舌も益はないのです。而して又之を實行する機會は何れの時、何れの場所にも在るので、先づ近きより之を實行するに必要であります。アリストートルは徳は習慣

であるといふ事を申しましたが、品性は或意味から云へば習慣です。實行が生命となり、習慣となるのです。兎角私共の欠點は何事も希望に止りて實行とならぬとです。殊に私共が徒に口舌の人となるといふとは遺憾の事であります。私共は品性を養ふと云ふ事に就て、此點に十分注意を致したいものです。どうも私共日本人は概して手足の働くよりも口の働く方が早い傾があるやうです。是は學生許りでない、労働者に至るまで理窟をいふとが上手で、或人が日本人は誰でも辯護士になれる資格を備へて居ると申したのは誠に適評であると思ひます。どうも緘黙して勤勉實行するといふことは日本人の長所でない。従て基督教徒も随分理窟をいふとを知つて居る、不平を鳴らしたり、大言壯語するとを知つて居る。併し品

性といふものは唯實際に働いて養はれる者で、理窟や大言壯語では養はるゝものでない。故に品性の修養に心掛くるものは靜に自分のなすべき本分を盡し、着々として其學びたる處を實行するのが必要です。卑近の事より初めて常に自己の徳を建て、人の徳を建つる事をなして往くのが私共の品性を養ふ道であります。又基督教徒の品性は常に積極的地位を取居らんければ進歩するものでない。私共は常に基督教の品性は『或物』であるといふことを忘れてはならぬ。唯悪言を出さず、悪事をなさずといふのでない、其以上の或物である。曾て或農夫が耕作して麥を蒔きました。而して彼は我畑に一の雑草の生ずるをも許さず、と申しまして、隅より隅に至るまで、悉く雑草を拔取りましたが、收穫時に至りまして彼

の畑には雜草も麥もなかつたと云ふ話がござります。唯消極的の事のみをなして、積極的の事を務めざるものは此農夫の如くで、何物をも得るとは出来ない。品性とは前申す通り「或物」を意味するので、何物をも有せざるは品性ではない。品性とは「善良なる或物を意するるので、悪がないといふのみでは品性と申すとは出来ませぬ。故に品性を修養せんと思ふものは此點に注意して常に進撃の態度を取て、積極的に或物を有せんとを心掛けねばなりません。以上は唯品性修養の心得に就て一二を申上げたのみでござります。が深く之をお味ひ下さるならば多少の補益があるふかと思ひます。

明治卅六年十二月 四日印刷

明治卅六年十二月 七日發行

著述者 高木 壬 太郎

發行者 堀 田 達 治

東京市京橋區銀座四丁目三番地

印刷者 米 田 長 太郎

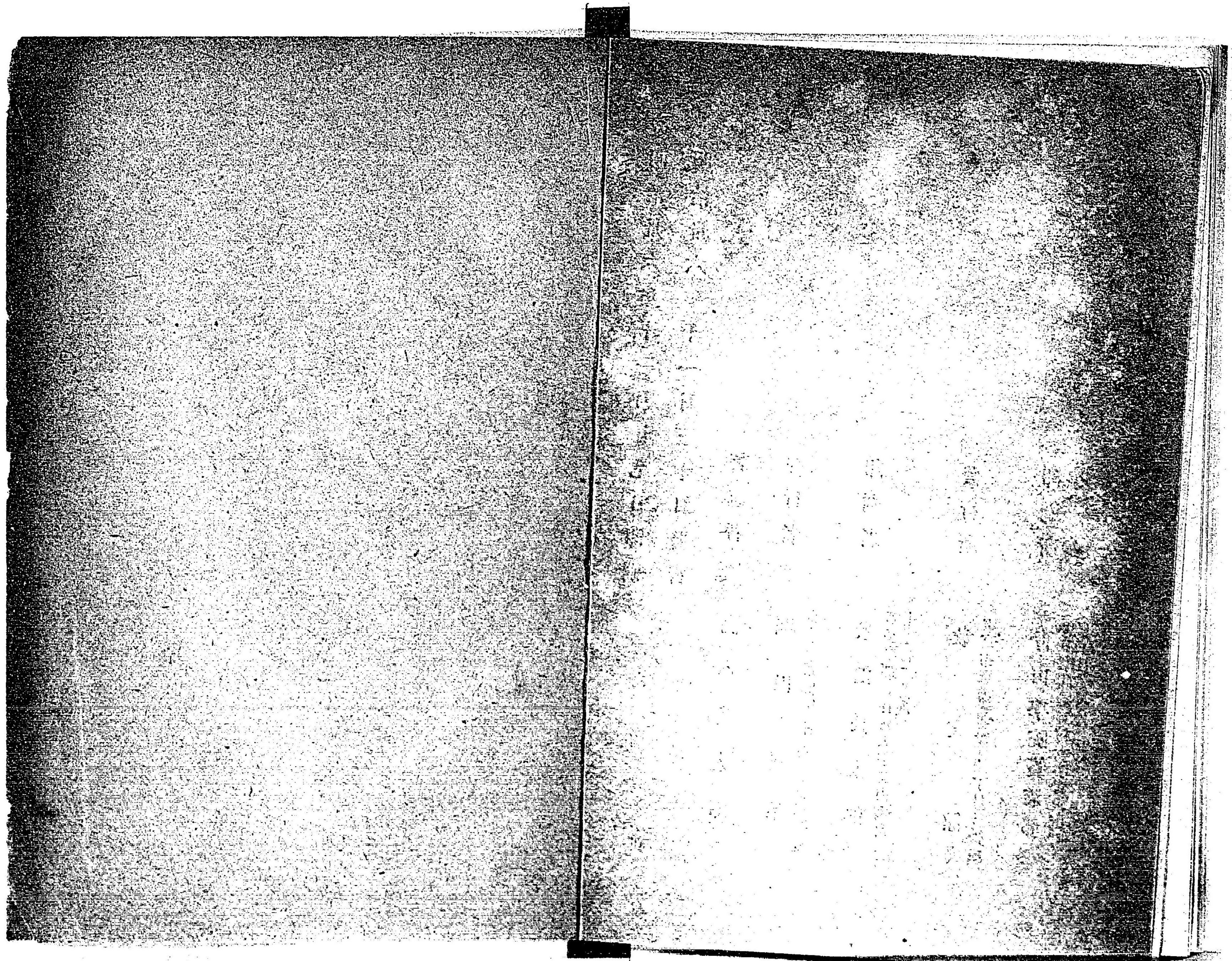
豊多摩郡澁谷村大字青山南町 七丁目二番地

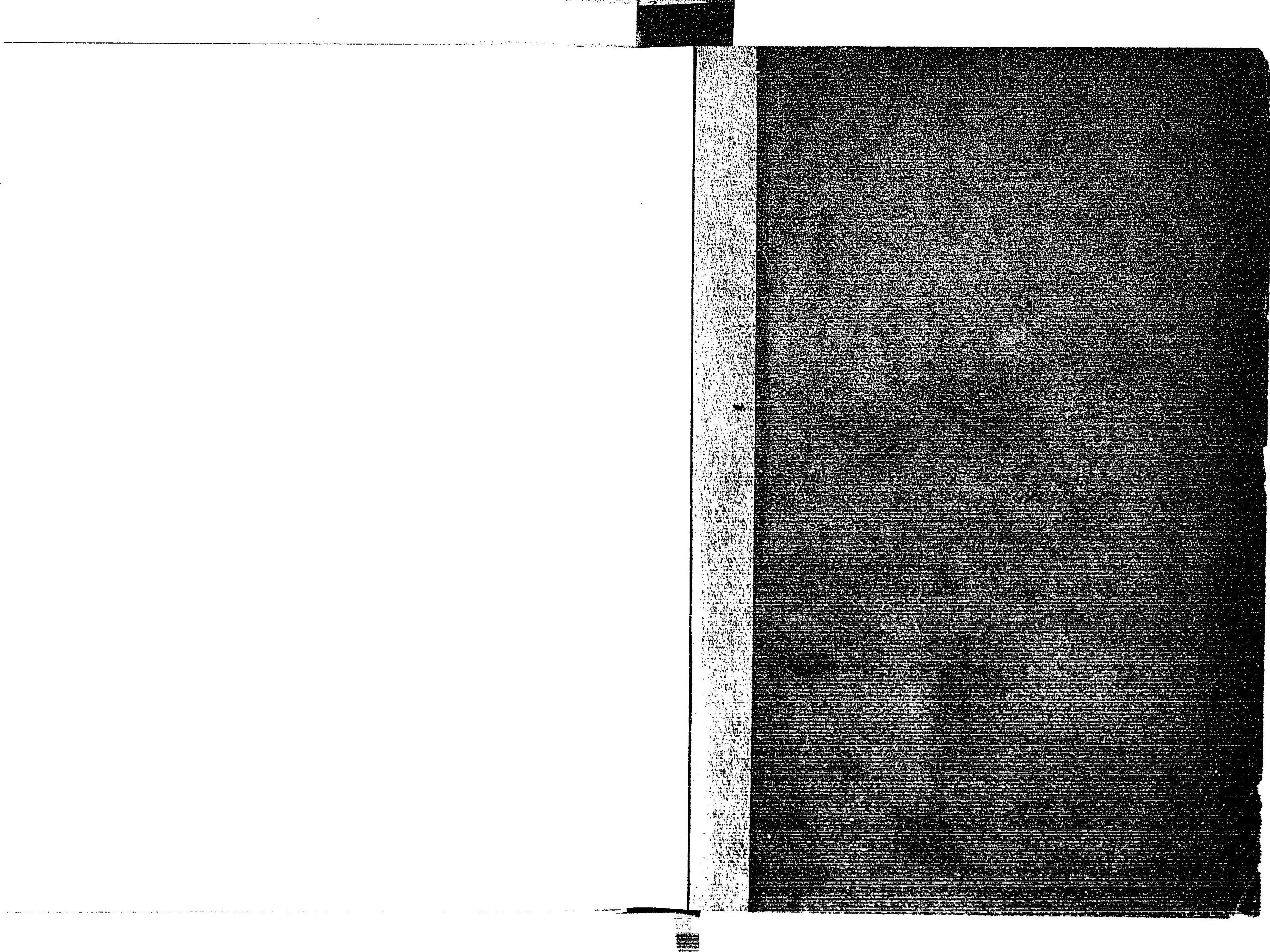
發行所 教 文 館

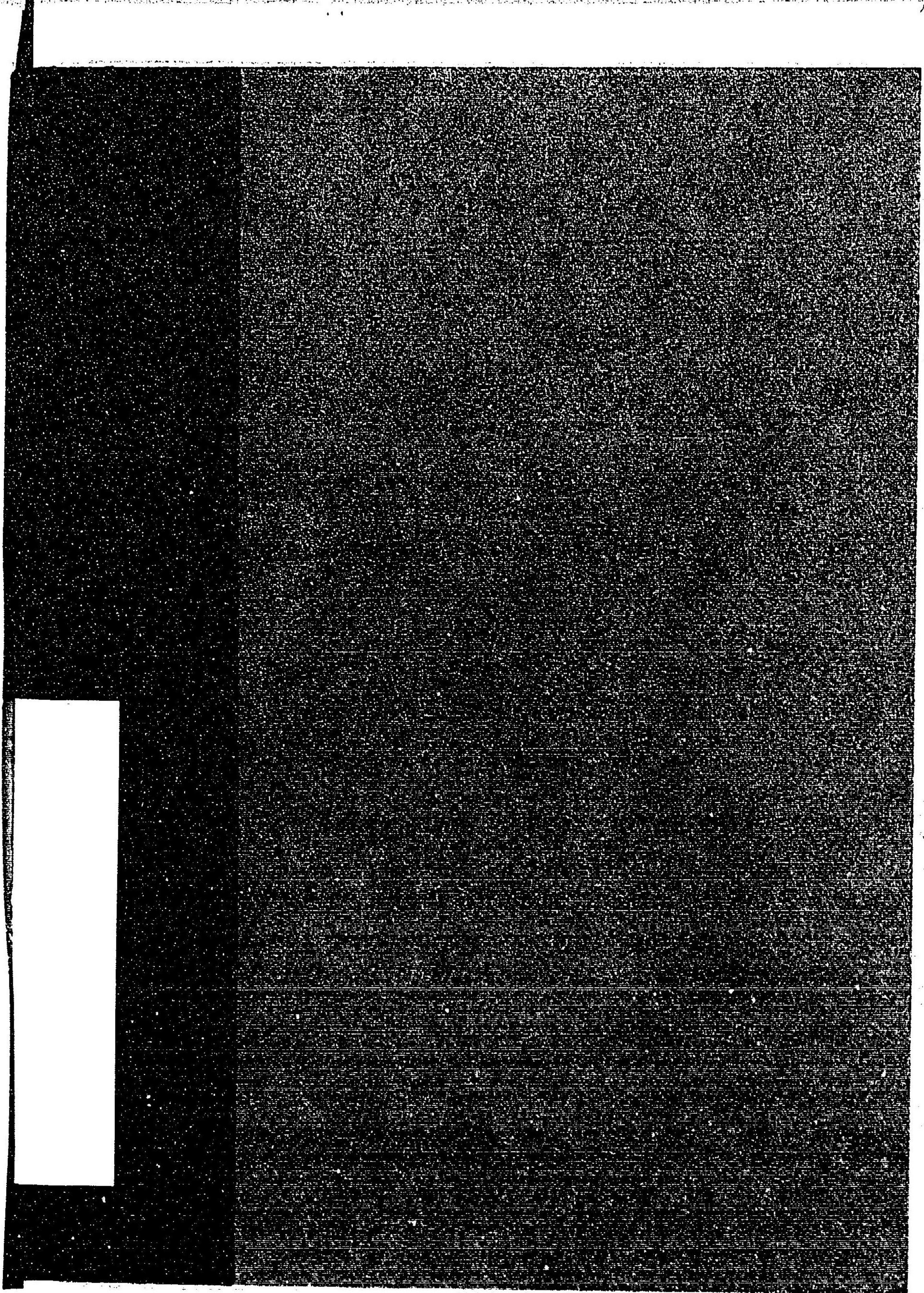
東京市京橋區銀座四丁目三番地

印刷所 青山學院實業部

豊多摩郡澁谷村大字青山南町 七丁目一番地







特61

241

基督教的品性

国立国会図書館

020466-000-5

特61-241

基督教的品性

高木 壬太郎 / 著

M36

ABI-0276

